
バカとテストと召喚獣 ～姉の呪術によりまさかのバカテスの世界へ！？～

紅枝垂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカとテストと召喚獣　　姉の呪術によりまさかのバカテスの世界へ！？　　

【Nコード】

N9031I

【作者名】

紅枝垂

【あらすじ】

姉の呪術により不幸にもバカテスの世界に来てしまった俺こと柊く、くそ、何故俺がこんな目に！？　多少のキャラ崩れ、原作崩壊があるかもしれないので、苦手な方は読まないほうがいいかもです。※主人公は基本、吉井達ではなく須川達や秀吉と行動します。そしてBLも御座いません。

第一章 事の始まり

「ああ、世界で一番愛しい弟よ。———全てを私の不幸の肩代わりをする人形へ」

「姉貴を殺す……」

寝言ではなく、ガチで呟いた。

そんな独り言を発する俺の前には、紅い文字が綴られている紙がある。

そして文字は『ごめん、お姉ちゃんミスちゃった♪』である。音符マークがやけに癪に障るのは気のせいだろうか。

「殺す絶対殺す、うふふふふ」

途中からおかしくなっているが現在俺が置かれている状況を言えば当然の結果だろうと思う。

現在の状況というのは、

姉が黒魔術使用。呪術というべきか。

← 高校2年の寝ていた俺、異世界トリップ。

← 起きて、リビング出ると手紙発見。

← 嫌な予感がするが、一応確認。

← 内容確認。『アンタはどうやらバカテスの世界に飛ばれたようね』

← 努めて冷静に、死ね、と呟く。

← 内容を読み終わると冒頭に戻る。

なんでやねんと突っ込み所満載だが、気にしないでおう。今までの？実験？と称する理解できない現象なんて山ほど見てきたからな。魔術？ 姉貴と妹が魔女です、多分。

うふふふふと部屋で一人笑っている俺を諫めるが如く、また、さきほどの紅い文字が消えて、新しく文字が浮かび上がった。

『えっと、バカテスの世界でアンタが所属するはずのFクラスで試召戦争をしてAクラスに勝てば戻れるみたいよ』

みたいよ、って何でそんな不確定条件？ アンタが起こしたんだろうが。しかもバカテス決定かよ。

『今日は文月学園の始業式だから早く行きなさい。詳しい情報はこ

の紙に写すようにしてあるから困らないでしょう』

紅い文字がまた消え、浮かび上がったと思ったらまた消える。そして今度は淀んだようなどす黒い赤で地図が表示された。何コレ……何でこんな災難を表すような色なの？

それより、これは絶対？実験？の派生だろ。異世界送り込もうとして、代わりに創作の世界に飛ばしたただけだろ。絶対ミスってないね、わざとだね。俺にはわかるさ。これは絶対故意的に起こしたことだと。というか条件も信用していいのかわからんな。

『FクラスがAクラスに勝つところ見たかったの』とか言われるのが頭の中で再生される。しかもフルボイスで。創作の文だというのに。

こんなオカルト染みた事は今回だけじゃないので、？前？みたいになるだろうーっと気分を一新し、さっきの紙を手を持ち俺は家を出る。家の内装と外装は同じだったが場所が違っていたのに少し驚いたが、まあ気分を変えてみたらこんなこと一生に一回もあるかどうかかわかないしね。楽しまなきゃ損だろう。

失敬、寝巻きのままで始業式に行くとところだった。また家の中に入ると、リビングには諭吉さん一人と真新しい制服があった。あれ、これ見られてるってことは風呂も覗かれてんじゃないやね？　まあ別に姉貴だからいいけどさ！

☆

「新入生、遅刻寸前だぞ」

俺は玄関の前でドスの聞いた声で呼び止められる。浅黒い肌をした短髪のいかにも肉体派教師然としている男だから、確か……鉄人

だったはず。いや、あだ名ね。多分本名ではないはず。——多分、おそらく、きっと。

俺は手元にある紙を見る。『西村』と血がそのまま付着したみに浮き上がった。やはり鉄人はあだ名で本名は西村か。

というか、システムの改変を直訴したい。これじゃ、俺オカルト研究部に拉致されちまう。

「おはようございます、西村先生」

よし、まずは当たり障りのない挨拶からだ。というか何故俺が新入生だとわかったんだろう。

姉の補正？

確か文月学園って入学式の前にクラス分けのテスト受けるんだよね？ んで今は入学式というわけで、しかも俺はこの世界に来て初日。鉄人から新入生と呼ばれたし、いや、浸入生ともとれ——

「挨拶なんてしてる場合じゃないだろう、もうそろそろ遅刻するぞ——っ　なんだその紙は？　お前は俺に喧嘩売ってるのか？　おい、無視するな——」

——るし、浸入してるわけだから。あれ、間違ってる？　つまり俺は今、制服を勝手に入手したあげく堂々と門をくぐろうとしたのか？　まあ、落ち着け俺。とりあえず、入学しているか確認してみよう。

「——西村先生、俺はこの在校生ですか？」

「俺の話はスルーか。そうだな。お前は特例で入ってきたから——」
よし、やはり俺は新入生で合ってる。でも、試験を受けたのか？
いや、ここは姉の補正で受けたことになっていると信じよう。

「先生、俺はちゃんと振り分け試験に受けましたか？」
否、やはり信じれない。だから俺は鉄人に聞いてみたんだ。すると、

「ああ、その件についてだな」

手にもっていた封筒を俺に差し向ける。確か封筒の中にはクラスが書いているはず。つまり、俺は振り分け試験にちゃんと受けたことになっているわけだ。多分姉貴が補正してくれただからにはAクラスあたりに配属されるのかな？

「柊、お前はバカだったんだな。何というか、正直、去年受け持ってたバカをずっと見ていた俺でも呆れた」

ちいつ、うまく開かないぜよ。鉄人は開けられない俺を哀れに思ったのか、代わりに開けてくれた。勿論開け方は封筒を横に向け、端をおもつきし引っ張り、真ん中を裂かせるという豪快な開け方だ。結果が裏向きに地面に落ちた。

俺はしゃがみ、それを拾い上げ結果を見たんだ。

「現実逃避をするな馬鹿者。お前、現実には魔術なんて代物ないんだぞ？ 特に物理と国語についてだ。お前のせいで、担当教師が魔術について理解しすぎて、魔術を試そうとしたぐらいだ。人の深層世界の大半はその人の起源、存在意義で満たされており、稀に超能力者とかいるがそれは、天然的に深層世界を現実反映させている天才だ？ お前はどの問題を解こうとしたんだ。随筆文でどうやってそんな答えが出るんだ。お前の起源はバカか？ 妄想か？」

『柊夜子……Fクラス』

「その辺の定義から行きますとあれですね。先生の起源は肉体バカですね、いえバカというのは褒め言葉のことではなく、純粹に愚昧のことですね」

「そうか」

「そうですね」

そう言ってあははと、二人で笑いあう俺と鉄人。場の空気はガンマンの真剣勝負に酷似していた。何でFクラスなんだよ。いや確か姉貴がFクラス所属されているとか言ってたけどさ。けどね？ Fクラスってのはバカの代名詞とも呼べるんだよ？ ここ文月学園はアレなんだ。Aが最高でFが最低という設備、勉強全般そうなんだ。あと名前云々に触れた奴はトイレに来てくれ。や、別に告白じゃないから。その代わり酷いことするだけだから。

その時チャイムが鳴ったんだ。

シュツと風を切る音が続いて鳴った。チャイムはまだ鳴り止んでないのに聞こえるのは、俺の感覚が最高点に達しているのか、鉄人の動きが動きなのか。否、両方だ。

俺はそれをすかさず、しゃがんで避ける。鉄人の手が空を切った。拳が握り締められているところを見ると、殴って気絶させようとしたのか。なんという教師。体罰だろ。

空を切った反動で少し、だが確実に鉄人の動きに鈍りを見せた。

俺はそんなチャンスを見逃すわけもなく、しゃがんだ状態から鉄人の足を薙いだ。完璧、避けれそうにないが。

にやりと鉄人が笑う。

そして、奴はジャンプしてそれを避けやがったんだ。よろめきはフェイク。俺は騙されたようだ。

だが、当然それを予想していなかった俺ではない。薙いだ要領で

身体を反転。すかさず立ち上がり、学園とは反対方向に駆け出す。鉄人は職業柄、遅刻した生徒を待つ為に追ってこない。計画通りだ。

俺は学園の壁を辿って周り、浸入できそうな場所を探した。すると、思いのほか簡単に見付かった。場所はプールだ。この時間帯を相まってか、周りには誰もいない。好機だ。

近くにあったモノ、標識などを動員させ、俺は壁を乗り越えたんだ。呆気ない、余裕すぎた。この学校の警備体制を見直すべきだなと心の中でここの学園長に罵倒し、Fクラスに向かった。

『――来たようだねえ、夜子』

第一問 (1)

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

『(1) 得意なことでも失敗してしまうこと』

『(2) 悪いことがあった上に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

『(1) 弘法も筆の誤り』

『(2) 泣きっ面に蜂』

教師コメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがあります。

柊夜子の答え

『(2) エンカウント続き』

教師コメント。

ことわざに和製英語が含まれていることに気づきましょう。

「おお、これが噂の2年F組か」

俺は新校舎と旧校舎のうち旧校舎側に属する2年F組のプレートがある教室の前で呟いた。

今後少し行動をきつと、共にする仲間たち、どんな奴がいるか心配である。

主にバカな奴、痛い奴、虐め上等な奴、めちゃくちゃドMの奴はいないだろうか、俺は不安でたまらない。

よし、とりあえず最初の挨拶が肝心だ。落ち着こう。

落ち着いたのを見計らい、俺は勢い良くドアを開けてから中の皆に出来る限り不快感を与えないように言い放つ。

「どうもー、今年から転入しました柊でーす！」

誰からの反応が無かったのは、皆が驚いているからと信じたい。決して無視じゃないはずだ。

通常の机と椅子、及びチョークなどの消耗品すらともに支給されず、足の折れた卓袱台と腐った畳、綿の殆ど入っていない座布団しか無い部屋は正に廃屋そのものであった。これは幾らなんでも最低限の教室としての役割を果たしてないと思う。窓も割れているしね。

俺は近くの空いてる席を見つけ腰を下ろす。場所は廊下側の前から二番目。

「なんじゃ。お主、転入生か？」

妙な翁口調の声のする方向を見ると、なるほど美少女がいた。小柄な体に、肩にかかる程度の長さの髪をゆったりと縛ったいでたち。スペックは、女子制服を着たら女の子と勘違いされる程。

これが美少女あらずして誰が美少女かつということだと思うね。

卓袱台の下で、隠れて名前と詳細を確認、名前は多分秀吉だったと思うけど。そして勿論、あの紅い文字が綴られている紙で確認。

名前は木下秀吉で演劇部所属、声帯模写はお手の物か。

「うむ。君は秀吉君だね」

一度、秀吉の言葉に頷きを返し、秀吉の名前を確認する。姉の木下優子ではないはずだ。

「ほう、もう既に名前は把握しておるのか」

「主に美少女だけだけど」

咄嗟に苦笑しながら嘘を吐く俺。異世界から来ましたとか、紙に書いてありましたとか言ってもちゃんと伝わった覚えがないからな。

「わかっておると思うが……ワシは男じゃぞ」

言いにくそうに綺麗な顔を少し歪める秀吉。

「ああ、わかってる。俺も似たような経験があるからね」

経験……それは女の子と勘違いされること。俺は黒い髪を腰まで伸ばしていて、その所為かたまに女の子と勘違いされることがあるのだ。同じコンプレックスを抱いているなら仲良くなれそうだなと思う。でも決して、俺は美形ではないことだけをおこう。

「おおっ、お主だけじゃぞ、ワシを男と初対面で見てくれたのはっ」

秀吉は興奮を抑えられずに俺の手を掴み、握手をする。綺麗な手だなと考えたのは場違いではないはずだ。美少女と手を繋ぐなんて——美少女ではなく男子だけど——照れるぜよ。

「これからよろしく」

「よろしくじゃ」

途中で色々秀吉の好感度アップさせたし、初対面にしてはうまくできたようだ。友達（美少女）一人確保だぜ。

ガラガララッと扉が勢い良く開く。そして一人の生徒が入ってきた。アレは多分主人公の吉井だったはず。あまりバカテス見ていなかったなので、物凄く曖昧だが。

「すみません、ちょっと遅れちゃいましたっ♪」

愛嬌たっぷりと言い放つ吉井。そういや本令が鳴ったのに先生まだ着てないな。

「早く座れ、このウジ虫野朗」
教卓の前に立つ男が返事をする。彼は教師ではないはずだ。180強ぐらいの、やや細身だが体が鍛えられているように見える。スベックは意志の強そうな目をして短い髪のツンツンと立てていて、結構イケメンである。

「聞こえないのか？ ああ？」
それにしても口が悪いのは元からか、冗談で言ってるのかは分からない。吉井とこの生徒はどういう関係なのか知らんからね。

「……雄二、何やってんの？」
どうやら結構仲が良いらしいのは今の言葉で理解できた。まさかの恋人という関係性だったら驚き。

「先生が遅れているらしいから、代わりに教壇に上がってみた」
「先生の代わりって、雄二が？ なんで？」

「一応このクラスの最高成績者だからな」
「え？ それじゃ、雄二がこのクラスの代表なの？」

「ああ、そうだ」
雄二と呼ばれる生徒もとい代表はにやりと口の端を吊り上げた。そうか、こいつがこのクラスで最高成績者なのか。

「これでこのクラスの全員が俺の兵隊だな」
ふんぞり返って床に座っている俺たちを見下ろす代表。

「それにしても……流石はFクラスだね」
吉井は空いてる席を探そうとしているのかあたりを見回している。

「えーと、ちょっと通してもらえますかね？」

覇気の無い声が教室に響く。どうやら遅れていた担任が着いたらしい。

寝癖のついた髪によれたシャツを貧相な体に着たことで冴えない男を単調に表している。

「それと席についてももらえますか？　H Rを始めますので」

「はい、わかりました」

「うーっす」

代表と吉井はそれぞれ返事をし、そこらの席に着く。席といって良いのか甚だ疑問だが。

担任は二人が着席するのを待ってから壇上でゆっくりと口を開いた。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎です。よろしくお願いします」

担任は薄汚れた黒板に名前を書こうとして、やめた。チョークすらろくに支給されてないとかどんな学校なんだよ。

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されてますか？　不備があれば申し出てください」

このクラスには机がなく、あるのは畳と卓袱台と座布団だけだ。凄い斬新な設備で革命でも起こりそうだった。

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないですー」
誰かが担任に不備を申し出る。俺のも綿全然入ってないぞ。

「あー、はい。我慢してください」

「先生、俺の卓袱台の足が折れています」

「木工ボンドが支給されていますのであとで自分で直して下さい」
「センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきますよう」

以上が不備。なんだこの廃屋は。

「必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください」

ぷーんとかび臭い空気が漂う。教室の畳が腐っているからであって人の放屁とは違うはずだ。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします」

担任の指名を受け、俺の前の席の奴……秀吉が立ち上がった。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

堂々としており、緊張は見受けられない。流石演劇部で人の視線は慣れているのだろうか。というか次俺じゃん。何て言おうかな。

「——と、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

一度微笑んで自己紹介を終えた秀吉。不覚にもその姿に可愛いと思ったのは内心だけに留めておこう。

んじゃ次は俺だな。簡単に簡単にと。

「柊夜子。髪を伸ばしているのはオカマではなく、姉に切らせてもらえなかったからである。ああ、名前について触れた奴は俺が直々にしばくからちよつと言いたい奴は校舎裏こい、相手してやるよ。俺はAクラスに勝つぞと思ってるからその辺を含めて今年一年よろしく」

オッケー完璧すぎる挨拶だ。

そこから自己紹介が滞り無く進み、次は吉井の番だ。

「——コホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね♪」

一秒の間もなく場の空気が同調する。そして、男子生徒達は（俺含む）、

『ダアア——リ——ン——!!』

叫んだ。

「——失礼。忘れてください。とにかくよろしくお願いします」
若干作り笑いで席に着く吉井。バカだろアイツ。

その後も名前を告げるだけの作業が続き、そろそろ辟易してきた頃に扉が開いた。

どうやら走ってきたのか、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れた。髪の毛がピンクか……地毛だったら凄いね。

「あの、遅れて、すいま、せん……」

『えっ?』

俺以外の男子全員が驚いたような声上がる。何でだろう?

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願ひします」

「は、はい! あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願ひします……」

途中から尻すぼみになったが、可愛いからよしとしよう。

肌は雪の様に真っ白で、背中まで届くやわらかそうな髪は、ピンクという趣味が悪い子みたいな感じの色をしていた。男だらけだったFクラスに唯一の美少女と言えよう。秀吉は男だからね。いや容姿的には美少女だが。

「はいっ！ 質問です！」

既に質問を終えた男子生徒が手を上げ、質問の権限を得る為に口を開く。

「あ、はいっ。なんですか？」

登校して数分も立たずに質問され、驚く姫路さん。ピンクは現実世界では受け止められないのです。

「なんでここにいますか？」

質問の権限を得た男子生徒は凄い失礼な質問をした。

「そ、その……振り分け試験の最中、高熱を出してしましまして……」

その言い方からすると、学年首席レベルなんだけど熱を出したから悪くなったと聞こえる。確かテストの途中退席は、0点になるとか本で見たことあるような。

言い訳染みたことを聞いてクラスのあちらこちらから言い訳の声がある。

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？ アレは難しかったな』

『俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて』

『黙れ一人っ子』

『前の晩、彼女が寝かせてくれなくて』

『今年一番の大嘘をありがとう』

バカが多かった。

「で、ではっ、一年間よろしく願いしますっ！」

クラスの奇異な視線に耐えかねなくなったのか姫路さんは早々と空いてる席に着く。

☆

「はいはい。その人たち、静かにしてくださいね」

担任の注意が教卓を叩きながら飛んだんだ。飛んだ方向を見るとどうやら吉井達の方角。

すると、バキィツ、バラバラバラバラ……と教卓が粉碎された。

担任の筋力は凄かったのか、教卓の耐久度がカスだったのか……判断しかねるが多分担任の筋力が凄かったとだけ心で思っところ。

いえ、現実逃避ですね。

「え〜……替えを用意してきます。少し待っていてください」

担任は気まずそうに告げると教室から出ていった。やっぱ、設備酷いのな。

第一問 (2)

「さて、それでは自己紹介の続きをお願いします」

壊れた教卓を替えて、気を取り直して自己紹介が再びが開始される。ちなみに替えてきたといってもまだボロっちい。

「えー、須川亮です。趣味は――」

特に問題として取り上げるようなことはなく、自己紹介の進行だけが滞り無く進む。そしてラストの代表が担任に急かされた。

「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

「了解」

代表は席を立ちゆっくり教壇に歩み寄る。

その姿はさきほどとは打って変わって貫禄を感じられたんだ。

「坂本君はFクラスの代表でしたよね？」

担任に問われ頷き返す代表。その様子はかなり余裕が感じられる。ふむ、代表としての挨拶をするんかね。

かなりの自信に満ちた表情で教壇に上がり、俺たちのほうへ向き直る。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも、好きなように呼んでくれ」

やはり挨拶か。Fクラスってバカの集まりなんだから誇れそうにないのな、代表っていう肩書き。現にクラスメートからあんまり注目を浴びてないし。

「さて、皆に一つ聞きたい」

間の取り方がうまかった。全員の視線が代表に向けられる。代表が皆の様子を確認した後、代表の視線は教室内の設備の各所に移りだす。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台。

全部汚れた、学校とは思われないほど粗悪な設備。そんな視線が代表につられて皆が見る。

また少し間を取りおもむろに語り出す。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが――」

また一呼吸をおき、全員に告げる。

「――不満は無いか？」

『大ありじゃあっ!!!』

二年F組男子生徒全員の魂の叫びと思われるほどの声。一寸の違いも無くユニゾンした。

「だろう？ 俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

『そうだそうだ!』(↑男子生徒A)

『いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ! 改善を要求する!』(↑男子生徒B)

『そもそもAクラスだって同じ学費だろ? あまりに差が大きすぎる!』(↑男子生徒C)

『姉貴のせいでこんな目に遭うなんて散々だ! 畜生!』(↑俺)

代表が問題として正式に取り上げた為、口火を切ったように俺含む男子達からの不満の声があがる。

「みんなの意見はもっともだ。そこで」

俺たちの反応に満足したのか、自信の溢れた妙な笑顔を浮かべて、

「これは代表としての提案だが――――」

憎ったらしいほどの野獣みたいな風に八重歯を見せ、

「――FクラスはAクラスに『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」
代表は当初の俺と同じことを言った。仕掛けると言った時点で勝負気は満々だ、と言うような代表の顔。

それと、俺が言っていた勝負負けるはこの試験召喚戦争のことだ。詳しい内容は覚えていないが、操作が難しいらしく試験召喚戦争で用いられる点数を基準とした召喚獣の点数だけで闘いの勝ち負けが決まるやつだったはず。

俺は紙で詳しい内容を確認する。紙というのは朝のあの血みたいなバイオレンスな臭いがするやつな。

試験召喚戦争…、通称『試召戦争』。この学校だけで適用される、制限時間が一時間だけで無制限の問題数による点数の上限が無いテ

ストに、関係するオカルト染みたシステム。以下のルールを順ずる形で行われ、宣戦布告するクラスに負ければ、一ランク設備が下がり、勝てば、クラスの設備を交換できるという物凄い特殊な戦争だ。

一、原則としてクラス対抗戦とする。各科目担当教師の立会いにより試験召喚システムが起動し、召喚が可能となる。なお、総合科目勝負は学年主任の立会いのもとでのみ可能。

二、召喚獣は各人一体のみ所有。この召喚獣は、該科目においてもっとも近い時期に受けたテストの点数に比例した力を持つ。総合科目については各科目最新の点数の和がこれにあたる。

三、召喚獣が消耗するとその割合に応じて点数も減点され、戦死にいたると0点となり、その戦争を行っている間は補習室にて補習を受講する義務を負う。

四、召喚獣はとどめを刺されて戦死しない限りは、テストを受けなおして点数を補充することで何度でも回復可能である。

五、相手が召喚獣を喚びだしたにもかかわらず召喚を行わなかった場合は戦闘放棄とみなし、戦死者同様に補習室にて戦争終了まで補習を受ける。

六、召喚可能範囲は、担当教師の周囲半径10メートル程度（個人差あり）。

七、戦争の勝敗は、クラス代表の敗北を持つてのみ決定される。この勝負に対し、教師が認めた勝負である限り、経緯や手段は不問とする。あくまでもテストの点数を用いた『戦争』であるという点を常に意識すること。

ちなみに召喚獣というのは、化学とオカルトと偶然により完成した「試験召喚システム」によって姿を現す召喚者をデフォルメした姿の80cm程の二頭身の分身である。

戦わせることが目的のため、たとえ一桁の点数でもゴリラ並みのパワーを持つが実際にはホログラムのようなもので召喚獣が触れることが出来るのは原則として召喚獣だけであり、特殊な処理がされた文月学園以外の場所では立つこともできない。

先ほどに述べたが、ルールに順ずるということなので勿論テストの点に比例するわけだ。つまり、バカの集まりのFと天才のあつまりのAでは、戦力差が天と地の差があると言えよう。それを代表は勝つと言ったのだ。勝ち誇る顔で。

『勝てるはずがない』

『これ以上——』

「良く言った代表！ 俺もその提案に乗るぞ！」

いらん負けごとみたいな言葉がクラス中に伝播する前に俺は賛成の意を唱える。というか、Aクラスに勝たないと俺元の世界に戻るか分からないんだよね。そうならなりふりを構えんだらう？ — それでちゃんと戻れるか分からないけど仕方ないんだ。

「転入生こそ良く言った。そうだ、必ず勝てる。いや、俺が勝たせて見せる」

『何を馬鹿なことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があつてそんなことを』

俺が加勢したのにもかかわらず否定的な意見が教室中に響き渡る。まあ、俺だってFクラスがAクラスに勝てるとは思っちゃいねえさ。だがな、それは単純にFクラスだけならな。フツ、こういうパ

ターンは物語に迷い込んだ俺みたいな人種がチートキャラになるのさ。それに本当にどうしようも無い時は——いや使えないか。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

代表の言葉に皆が更にざわつく。

「それを今から説明してやる」

代表が今日一日でだいぶ見た不敵の笑みを浮かべ、壇上から俺たち見下ろす。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いていで前に来い」

「……………!! (ブンブン)」

「は、はわっ」

康太と呼ばれた生徒が顔と手を左右に振って否定のポーズをとる。いやバレバレだから。

そして姫路さんはスカートの裾を押さえて遠ざかる。するとさきほどの男子生徒が顔についた畳の跡を手で隠しながら壇上へと歩き出す。

なんて奴なんだ。あそこまでひたむきに隠すなんて。下心あると姉の洗脳が働く俺とは別次元の人間だ。奴は本能で生きてやがる。

「土屋康太。こいつがあのある有名な、寡黙なる性識者だ」
ムツツリーニ

代表が紹介した。ムツツリーニだと!? まさか奴は本能と理性が共存する狭間の人間とでも言うのか!? 奴をこれからは尊敬と

畏怖を込めて、性職者と呼ぼう。

いやこういう系の話題になるとテンション上がるのが妄想人の性なんだ。

「……………!!（ブンブン）」

性職者はまたしても否定のポーズをとる。

『ムツツリーニだと……………?』

『馬鹿な、ヤツがそうだというのか…………?』

『だが見ろ。あそこまで明らかに覗きの証拠を未だに隠そうとして
いるぞ…………』

『ああ。ムツツリーニの名に恥じない姿だ…………』

クラスの男子どもも崇めていた。現在の性職者の姿はとても哀れ
だが。

流石ムツツリにちなまれた異名は伊達じゃない!

「姫路のことは説明する必要もないだろう。転入生以外の皆だって
その力はよく知っているはずだ」

「えっ? わ、私ですかつ?」

ああ俺は知らないから説明してくれると思った俺が馬鹿だったよ。
いいさ、俺には魔法の紙があるもんね。

姉が世界に存在しないからついテンションが上がってしまったぜ。
だが、離れるだけじゃ意味が無い。永劫におさらばするために俺は
アイツを殺す…………。

紙で姫路を調べる。どうやら学年で一位に次ぐ二位の成績保持者
らしいことと、スキルが『毒物調薬^{りょうり}』をお持ちらしかった。

「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

学年二位ということだけあってその召喚獣の強さは格別と考えて
良いだろう。このクラスじゃ俺に次ぐ強さだろうな。いや一回も俺
召喚したことないけど。

『そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだった』

『彼女ならAクラスにも引けをとらない』

『ああ。彼女さえいればいらないな』

最後の人は戦力としての意味以外の可能性は一刀両断しとこう。

「木下秀吉だっている」

秀吉。さきほどの美少女だな。演劇部に所属しているだけに劇が物凄く凄いということだけはわかったが、他にどんな特技があるのか知らんな。

『おお……!』

『ああ。アイツは確か、木下優子の……』

木下優子…、確かAクラス所属している秀吉と容姿が一卵双生児のように似ているみたいで、隠れ腐女子って書いてあったはず。腐女子属性の姉貴、怖えー。ますます秀吉と親近感が増す。これからは秀吉くんから秀吉と呼ぼう。同じコンプレックス、同じ境遇。うん、これは絶対意気投合できそう。他におかしい姉貴を持つ苦労人な弟いないかな。姉貴を母親と置き換えてもいいけど。

「当然俺も全力を尽くす」

代表が言った。代表だけあって成績はFクラス内では姫路さんと俺の次に良いだろうね。けど、Aクラスの最下位にすら代表は届かないだろう。つまり、実質的に俺と姫路さんだけがAクラスと対等に戦えるってわけだ。

『確かになんだかやってくれそうな奴だ』

『坂本って、小学校の頃は神童と呼ばれていなかったか?』

『それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか』

『実力はAクラスレベルが二人いるってことだよな!』

段々クラスの意見が前を向いてきた。士気が確実に上がっている。

「転入生も勉強できるだろう？」

代表がこっちに向き俺に言ってきた。チッもう既にばれていたか。そうだ、俺もテストを受けなかっただけで実はAクラス並の頭脳はあるはず……。多分きつとおそろくね。

「フッ、目聡い奴だぜ。良く分かったな代表」

「ああ、お前は明久と比べ物にならないほど行動が様になっていたからな」

一度代表は吉井のほうに向きちよつと馬鹿にするように鼻で笑った。

「ちよ、ちよつと！ 雄二何てことを言うんだよ！」

「落ち着け、お前の知ってる範囲でこいつに問題を出してみろ。絶対コイツは答えるぞ」

「ああ当然だ」

「初対面の人に馬鹿にされた！？ ボクってそんな馬鹿そうな行動してるの！？」

俺が話にのってやると簡単に吉井ものつてきてくれた。吉井虐め、案外面白いかも。

「ほら、早く質問してみなつて。俺答えるよ！」

「わかったよ、これで答えられなかったら転入生の方が馬鹿なんだからね」

「いいぞ、お前レベルでどう解けないのか知りたいぐらいだからね」
さてさて、どんな問題が来るだろうか。

「ベンゼンの化学式は何！」

クッ……馬鹿な子の問題だと思っていたが最初から難問がくるとは……っ！！ ——決して俺はバカじゃないんだ。きつとアレだ。今物凄く焦っているから思い出せないだけで……すいませんでした。

いえ、まあ初歩的な分を覚えていないだけなんだ。失礼、バカですいません。ちゃんと勉強します。雪村流暗記術で覚えます。あれ、杏って完全記憶能力だったけ？　まあいい、勉強します。だけどこの場合は茶を濁して逃げます。

「ふふっ、僕がベンゼンの化学式を出せないとも思ったのかい？　もうこないだテストしたから覚えてるのだよ！」

「なんだと……？」

くそ、いつテストなんてしたんだ。

「さあ言ってみなよ」

くそ、吉井ごときが俺に勝ち誇った表情を向けてくるだど！？　仕方がねえ……。

「そもそもベンゼンというのは、モル質量が78.11 g/molで、融点が5.5℃、42.0 F、279 K、沸点が80.1℃、176.0 F、353 Kの最も簡素な芳香族炭化水素である。ちなみにベンゼンの外観は無色透明の液体な。そして水への溶解度は0.8 g/L (25.0 C) で、粘度が0.652 cP at 20.0 C、双極子モーメントが0 Dの特性を持つ。

そして芳香族炭化水素というのは、一重結合と二重結合が交互に並び、電子が非局在化した6つの炭素原子から成る単環あるいは複数の平面環をユニットして構成されている。名前の由来は、構造がまだ未明だった昔、強烈な臭気を放つものが多かったかららしい。

また、閉じた共役系を持つ、炭素は sp² 混成軌道から成り平面構造をとる、炭素－水素比が低く、燃やすと煤がでる、脂肪族炭化水素のように求核置換反応を受けず、親電子置換反応を受けるという特性を持っている。

以上のことより推測できると思うが、ベンゼンの化学式――……というわけだ。馬鹿じゃない吉井君は当然わかるよね？」

そう、俺が述べたベンゼンの化学式はまるで意味が通らない言葉（魔術的概念で取り入れるなら意味が通るけど）。だがしかし、理解できないからこそそこに付け入る隙があるんだ！ 馬鹿じゃない吉井君は当然わかるよね？ がポイントだ。こうすれば馬鹿な吉井は俺の策謀にはまるだろう。ふふっこれぞ俺クオリティー。

「と、当然だよっ！ 僕はこれでも勉強できるんだよ！ 流石転入生君だね！ ここまで解けるなんて！」
途中から焦りすぎて妙に大声を出している。というか馬鹿だなこいつ。皆は啞然とこっちを向いている。

『おおっ！ 転入生凄いぜ！ やるなあ！！』

『俺もそれちゃんと理解してたぜ！ 簡単だよな！』

『やっぱりな！ 俺もその答えで合ってると思ったんだ！』

……Fクラスがどれだけ馬鹿なのか理解できました。

第二問 (1) (前書き)

ラグズの逆位置の意味は、状況に流されてしまうばかりで本来の目的地を見失っていることに気がつくことやまた、移動に伴う危険、交通事故には注意が必要、現実逃避という意味だったはず！

第二問 (1)

問 以下の問いに答えなさい。

『(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X \parallel 2$ の方

程式を満たし、かつ第一象限に存在するXの値を一つ答えなさい』

『(2) $\sin (A + B)$ と等しい式を示すのは次の
 どれか、? ? ?の中から選びなさい。

? $\sin A + \cos B$? s

i n A - cos B

? $\sin A \cos B$

? $\sin A \cos B + \cos$

A sin B』

姫路瑞希の答え

『(1) X $\parallel \pi/6$

(2) ?』

教師のコメント

そうですね。角度を『 $\circ$ 』ではなく『 π 』で書いてありますし、
 完璧です。

終夜子の答え

『(1) そもそもXというのは古代魔術的用語による私意的考え
 の認識で、ルーン文字と同じく力を持つ(強制終了)』

教師のコメント

君にはラグズの逆位置が出ました。

代表が『俺たちの力の証明としてまずDクラスを征服してみようと思う』という提案をしたので、最初からAクラスと戦争するのではなく、Dクラスとの戦争となった。そんな俺の現在の配置は秀吉率いる前線の専攻部隊。立会人の教師は高橋先生という学年主任のため、勝負科目は総合科目だ。そして渡り廊下に現れるDクラス。ちなみに、吉井の配置は中堅部隊である。

さてどういう風に戦うかね。俺は秀吉のほうにちらりと視線を送る。どういう指示が来るだろうか。

「全員布陣を張るのじゃ！ 命を賭してDクラスを通すではないぞ！」

代表の命令↓戦死しそうになったら戻って補給しろ

秀吉の命令↓命を賭して盾になれ

フツ…、おバカな俺にはどっちが優先的かわかんないぜ。まあいい、勝てばいいだけの話だぜ。

「試獣召喚！」
サモン

声高らかに俺は宣言する。するとその俺の喚び声に応じて足元に幾何学的な魔法陣が現れる。教師の立会いの下にシステムが起動した証だ。そして、現れる俺の召喚獣。

女顔、腰まで届く黒い髪を一纏めに括って、浴衣姿。

まあ簡単に言えば、デフォルメされた俺の浴衣姿だ。くそ、女装しているみたいでキモいのだが。

「試獣召喚！」
サモン

Dクラスの女の子が一人俺に合わせて召喚する。ツインテールな高飛車そうな子だ。

そして召喚獣の姿は同じくデフォルメされたその子で装備は西洋の鎧に両刃の剣。……アレ……俺の召喚獣武器所持していないの？え、何コレ。

「先生！俺の召喚獣が装備無いんですけど！」

俺は学年主任の人に問うが、

「バグですかね、あとで報告しといてあげましょう」

あっけらかんに相手された！

「武器を所持していないアナタの召喚獣なんてゴミ同然！フッフッ早く愛しいお姉さまの所へ……」

何か物凄いレズ的な発言してらっしやる！？くそ、武器が無いからってテンパるな……、落ち着け俺。何かあるはずだ。きっと。

俺は何か役立つ物を探している最中、妙なものを見つけた。召喚獣の頭上に妙な参考みたいなのが浮かび上がった。多分戦闘力（点数）を示しているのだろう。

『Fクラス

柊夜子

VS

Dクラス

清水美春

総合科目

10点

VS

884点

』

ちょい待て！

何だこの点数！？

総合だろう！？

総合科目で

正しいよな！？

何で10点！？

「美春は幸運だったようですね、10点程度の雑魚なんて一瞬で蹴散らしてあげましょう」

すごい笑われてる！

やべ！

何この恥ずかしさ！

10点とか

俺死亡フラグじゃん！ 絶対戦死するじゃん！

ツインテの女の子の召喚獣が俺の召喚獣に向けて突っ込んでくる。
操作方法は——ええっと——わっかんねえ！

「跳べ！」

訳もわからず俺は叫んだ。だって操作方法とか習ってねえし。

相手の召喚獣の両刃の剣が刺さる寸前に俺の召喚獣は飛翔する。

おお、やるじゃん。俺の召喚獣。

そんな飛翔した俺の召喚獣の背中には蝙蝠のような羽。もしかしてアレ武器かな。

「な、なんですか。その羽は……っ！！」

向こうは驚愕に満ちた表情で声を荒げた。

「フッ、俺のことは自称吸血鬼の美男子と呼んでくれ」

俺は鼻で笑いながら言ってる。吸血鬼と考え付いたのは召喚獣から。

「私に話しかけないでください、菌がうつります」

さきほどまで声を荒げていたのが嘘のように冷徹に対応される。

何これ、俺悪いことしたの？

相手の召喚獣がジャンプし、俺の召喚獣へ向けて剣を振り下ろす。

細かな動作など無くて、おおざっぱな攻撃。そんな程度俺の召喚獣が避けないはずがない！

イメージ、具体的に避けるようにイメージをする。

ヒュイツ（俺の召喚獣が振り下ろされる剣をかわす）

ガッ（相手の召喚獣の甲冑を掴む）

スーッ（相手の召喚獣の首に牙を刺し、血を吸う）

……、あれ、アイツ勝手に行動してない？　くそ、やめろ！　こっち戻って来い！

そう命令すると、俺の召喚獣が血を吸うのをやめて俺の近くまで戻ってきた。

『Fクラス

柊夜子

VS

Dクラス

清水美春

総合科目

34点

VS

860点

』

何か召喚獣が敵の点数奪い取ってた。なにこの俺の召喚獣。訳わかんねえ。こんなのバカテスの世界観無視すぎるだろ。

よし、とりあえず気分を一新する為に周りを見ようか。

高橋先生↓啞然

ツインテの子↓啞然

俺↓半眼

秀吉↓戦死寸前

秀吉が死に掛けてた。

渡り廊下の壁際まで追い詰められていた秀吉の召喚獣（装備は青い袴に薙刀）に近づく、敵の召喚獣の背後に回るように素早く移動し、血を吸う（↑またもや勝手に行動）。

スーッ（血吸ってから5秒後）

スーッ（血吸ってから10秒後）

ズズズズズッ（血吸ってから20秒後）

やめろ！ その召喚獣の血なんてもう枯渇するから帰って来い！
俺は戦死した血を吸われた召喚獣の主が鉄人に連れて行かれるの
を血の涙を流しながら見て、秀吉に語りかける。

「大丈夫か？」

「だ、大丈夫じゃ。それよりお主の召喚獣が血を吸ってたように見
えたのじゃが……」

おっかなびっくりという様子で口から血をたらしている俺の召喚
獣を見ながら言う。

「よし！ まだ戦死していなくて生き残ってるのは俺たちだけだ。
避難するぞ！」

俺は半ば強制的に秀吉を連れて戦線を離脱する。秀吉が生きてて
良かった良かった。

第二問 (2)

「全員突撃しろぉーっ！」

教室へ引き返す中、吉井率いる中堅部隊が涙目でこちらに全力ダッシュしてきていた。……、何故だか吉井は目が赤い気がする。

「明久、援護に来てくれたんじゃない！」

隣で一緒に走ってた秀吉が吉井に話しかける。吉井の目を近くで確認、結論赤い。というか誰かに刺されたみたいに眼球が……、いや何もうまい。

「秀吉、大丈夫？」

秀吉の顔を窺いながら吉井が訊ねる。俺には心配無しなんだよな。やだな、俺泣いてないよ？ 転入生だから仕方が無いよね？

「うむ、戦死は免れておる。じゃが、点数はかなり厳しいところまで削られてしまったわい」

「そうなの？ 召喚獣の様子は？」

「もうかなりヘロヘロじゃな。これ以上の戦闘は無理じゃ」

「そっか。それなら早く戻ってテストを受け直してこないと」

「そうじゃな。全教科受けている時間はなさそうじゃが、一、二教科でも受けてくるとしよう」

秀吉は言うや否や教室へ走り出す。

お、吉井がやっと俺に気づいた。へへっ、やだな、さっきから目から汗が止まらないや。

「転入生は大丈夫？」

「あぁだい——」

「大丈夫なんだね！ よし僕と一緒に——」

「あぁっ!? 腰が痛い! やべえ! これはテスト受けないと!」
くそ、このまま戦場に行かされてたまるかよ! あんな奇異な目で見られる場所なんか行きたくないやい!

「吉井、見て!」

「あ、ぺったーぐふっ!」

チャームポイント言う前に殴られた。犯人はクラスメートの確か…、島山さんだっけ。

「島山さんどうしたんだい?」

「吉井、ちょっと待っててね。さあて転入生君こっち来て?」

ぺったんこの頼みだったら仕方が無い。俺たちより渡り廊下側にいる島山さんの傍に言われたように歩いて向かう。俺は賓乳が…大好きいや愛してるのさ。

パシッ! カッ! ヒョイツツ!

俺はこちら側に突っ込んでくるDクラスの人たちの中に投げられた。方法は…、最初に意識を剃り落とされそうな勢いで叩かれた為わかんない。島山さん、貴女は鬼ですか。

「雑魚が落ちてきたぞ!」

「こいつは雑魚だ! 後にしろ! とりあえず向こうの部隊を殲滅が先だ!」

「お姉さま! 今何をもったのですか! それはゴミ以下ですよ!」

酷い言われようだった。

「うふふふっ、貴様ら俺を誰だと思っている…? 先生! ここにいる場のDクラス全員にFクラス終行きます!」

俺は地味に涙を流しながら言う。敵はざっと7人。奇異な視線が嫌？ なにそれ？ 食えるの？ 空から降ってきたことで、もう既に奇異な視線が刺さってるけど？

「サモン試獣召喚！」

俺は言うのと足元でさきほどと同じく幾何学的な魔法陣が浮かぶ。

「くそ、皆！ こいつを一気に倒して向こうの部隊を素早く殲滅させるぞ！ 試獣召喚！」

『Fクラス

柊夜子

VS

Dクラス

その他

化学

1点

VS

89点

87点

9

4点 102点

67点

74点

81点』

召喚を応じなかったら戦死扱いとなる為、全員が召喚する。……、成り行きに任せたが、具体的な勝てる策ねえや。

「行くぞ！」

誰かの掛け声で7体同時に襲い掛かってくる。それを俺は、召喚獣を飛翔させ避けさせる。今迄姉貴のせいで培ってきた俺のセンスは天才的だな。我ながら二回目といっても数少ない召喚で良くここまで操作できるもんだなと思うぐらいだ。

敵の3体が衝突する前に止まり、残りの4体が仲良く全員ぶつか。指差して、操作ざまあと言いたいのは俺だけだろうか。否、俺だけではないはず。

その後もずっと俺は防戦一方で、敵に攻め続けられていた。

「くそ！　ちょこまかと……っ！！」

「清水達は先に行け！！　ここは俺が引き受ける！！」

そんな声が聞こえたので周りを確認すると、さきほどのツインテの子がこちらに猛ダッシュしてきた。

「いかせねー」

「退きなさい！　貴方みたいな豚野郎がお姉さまへの愛を阻められるとでも！！」

ベキッ

首から妙な音が聞こえました。

ああ、姉貴……、お前を殺したかったのにな……。……物凄く残念……。だ……。念……

☆

ハッ！？　いかんいかん、立ったまま寝て……。あれ？　首がかしいのは気のせいだよ……。？

ガシャアアン！

不意に窓が割れるような激しい音で我に返る。いかんせん、戦争だ。このまま立ったまま呆けていたらいいのだ。

周囲確認。

・吉井が「うわっ！ 島田さん！ そんな物をどうする気だよ！」
と言いながら、消火器を装備している。

・俺の周囲に死屍累々と召喚獣たちが血を抜かれたように戦死していた。

・俺の召喚獣が新たな標的を狙って勝手に行動していた。
・点数表記がおかしい。

落ち着こうぜ、柊夜子よ？ これは何かの夢だ。そう夢に違いな
い。だから俺は神なんだ！

「あははっ！ 恐れよ愚民ども！ この柊こと吸血鬼を！」
ふふっ、もう夢なんだからどうにでもなれってんだ、ははっ。

ブシャアアッ！

「う、うわっ！ なんだ！？」（↑男子生徒A）

「ぺっぺっ！ こりゃ消火器の粉じゃねえか！」（↑男子生徒B）

「前が見えない！」（↑男子生徒C）

「お前らの愛で前が見えない！」（↑俺）

……こんな悪い子するのは誰でしょうね。一体誰が――

「島田さん、君はなんてことを！」

オッケー覚えてたぜ、島田だな？ フフッ夢とはいえこんなリアル
な嫌なことされちゃ俺も怒るぜよ。

「Fクラスの島田め！ なんて卑怯な奴なんだ！」（↑Dクラス男
子生徒A）

「許せねえ！ 彼女にしたくない女子ランキングに載せてやるから

な!」(↑Dクラス男子生徒B)

「そうだ! 在学中に彼氏の出来ない状況にしてやる!」(↑Dクラス男子生徒C)

「殺す! 絶対殺す! オタクなめんじゃねえぞ!」(↑俺)

「……でも、男らしくてステキ……。お姉さま……」(↑Dクラス女子生徒A)

ふむ、というか島田ってどんな奴だっけ……?

島山↓島田

すみませんでした。

「だあああっ!」

俺が誠心誠意心の中で謝っていると、いきなり吉井が渾身の雄叫びを上げた。

シュワァァー

何かを投げてスプリンクラーを作動させたようだ。

見える、私にも見えるぞ! 視界が開けた! ナイス吉井!

ふと背後を見ると、代表率いるFクラス本隊がこちらに到着したようだ。なるほど、俺が気絶もとい寝ている間にFクラスはだいたい戦死したので、援軍をか。

「布施先生! Fクラス須川亮が行きます!」

同じクラスの人が俺に勝負を申し込んできた。アレ、何で俺同じ

クラスなのに……？

「サモン試獣召喚！」

彼の言葉と共に足元に幾何学模様が浮かぶ。ちなみに、俺の召喚獣は自立活動していた。

『Fクラス

柊夜子

VS

Fクラス

須川亮

化学

299点

VS

35点』

「な……なんだと！？ お前その点数……！？」

須川君は驚愕を隠せない。なにしろ、申し込んだ相手がFクラスということもあり、尚且つ、点数が300付近。Aクラスでもこれぐらいはそうそういないだろう。まあ、勝手に奪い取ってきたんだけどね、うちの召喚獣が。

「あははっ、俺がFクラスにいるからバカだと思ったのかね？ それは誤算と言うものだ！」

俺も誤算だったしな、この点数。嬉しい誤算だったがね。

「ま、待て！ 俺は味方——」

「くたばれえええええっ！！」

勝負は一瞬。奴の召喚獣の背後に俺の召喚獣が回り込み、首から血を吸うだけで終わった。俺が何も操作していないのは言うまでも無い。

「ウェルカム」

そう鉄人に呟かれ、補習室に連れて行かれる須川君は思いのほか哀れだった。

須川↓仲間に勝負を申し込み、戦死して補習室へ直行。

奴の死は俺の心の中だけに留めておこう。代表への報告はしない
でおいてやる。寛大な俺に感謝感謝、はっはっは。

第二問 (3)

一度Fクラス本隊に回収され教室に戻ったが、代表から『おっしや！ Dクラス代表の首級を獲りに行くぞ！』という指示でまたしても渡り廊下の戦場に逆戻り。ちなみに丁度下校時間のようで、下校中の生徒がたくさんいた。

「須川の死を無駄にするな！ 猛れFクラスの野郎ども！」
『おおー！』

俺の声を口火にFクラスの野郎どもがDクラスに次々と勝負を申し込んでいく。

それもこれ、須川の死の為、Fクラスの勝利の為。決して、代表に脅されたわけではない。

「そっちから回り込め！ 俺はコイツに数学勝負を申し込む！」

「なら俺は古典勝負を——」

「日本史で——」

次々に挑戦し、玉砕してはまた違う人が向かう。そんな風に繰り返していると敵部隊のリーダー格が空いた。この機を逃すわけもなく、俺が勝負を叩き込む。

「Fクラス柊！ 化学で勝負を申し込みます！」

俺は敵のリーダー格を見据えながら宣言する。

「くそ！ 試獣^{サモン}召喚！」

「試獣召喚！」

俺と彼の言葉と共に足元には幾何学模様が浮かぶ。システムが起動した証だ。

『Fクラス

柊夜子

V S

Dクラス

塚本
化学

334点

VS

110点

』

「何だと!? お前が……吸血鬼か……っ!!」

「はっはっはっ、俺に勝てるっても? 大人しく補習に行けや!」
勝負は一瞬。やはり背後に回り血を吸うだけ。流星、俺の召喚獣。

「Dクラス塚本、討ち取ったり!」

一際大きな声を発する。すると、周囲のFクラスの野郎どもから
歓喜の声が上がった。良いね、こういうの。大好きだ。

「本隊が出てきたぞ! 点数が残り少ない奴は補給、もしくは代表
に続け! ここは俺に任せろ!」

俺はそう周囲の戦死寸前の野郎どもに促す。塚本戦を見ていたの
か、皆すんなり俺の言うことを聞いてくれた。

「柊! 勝った後は覚えとけよ! ジュースぐらいは奢ってやらあ
!」

「坂本の安全は任せとけ! 近衛部隊が命を賭けて守ってやるぜ!」

「あ・い・し・て・るー!!」

フツ存外悪くないね、こういうの。最初は不満たらただったが、
今だけは姉貴に感謝感謝。

「ははっ、んじゃ補習室じゃなく教室でな!」

俺はそれだけ言葉を紡ぎ、仲間に背を向ける。

「さて……と……、……補習室に行きたい奴から出て来いや?」

5人程度か。いけるな。

「試獣召喚」

「「「試獣召喚！」」」

『Fクラス

柊夜子

VS

Dクラス

その他

化学

444点

VS

92点

96点

83点 102点 81点』

「バ、バカな……！？」

「400点オーバーだと……！？」

「奴は……化け物かっ！？」

「……吸血鬼とは相応しい名前だ……っ！！」

口々に良いこと言ってくれる。良いね、チート万歳。

「後悔は済んだか？ そろそろ逝こうぜ、補習室？」

にやりとマジでなりそうな笑みを俺は浮かべて言ってる。敵の

代表は野郎どもに任せて俺は裏方をやるかね。

☆

Dクラス代表 平賀源二 討死

そんな知らせを聞いた野郎どもの勝鬨とDクラスの悲鳴が混ざった、轟音が校舎内に響き渡った。

「凄えよ！ 本当にDクラスに勝てるなんて！」

「これで畳や卓袱台ともおさらばだな！」

「ああ。アレはDクラスの連中の物になるからな」

「坂本雄二サマサマだな！」

「やっぱりアイツは凄い奴だったんだな！」

「坂本万歳！」

「姫路さん愛しています！」

代表を取り巻く様にして男子が集まっていた。そこから代表を褒め称える声が無数に上がる。

バシッ！

不意に、背中に乗りかけられた。

「柊、ほれ約束のジュース！」

「代表も姫路も凄かったがお前も凄かったぞ！」

「だよなあ！」

「夜子よ、先ほどはありがとじゃった」

肩に乗ってきたのは、さきほどの俺と共闘していた男子で、他にも秀吉含めて数人が、俺の周囲に集まっていた。

「ははっ、サンキュ。まあこれからよろしくな」

ジュースを受け取る。そして、全員が手を出し、拳を少しぶつけた。少し痛かったがそれはそれで貴重な物だ。

第三問 (1)

問 以下の文章の（ ）に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であって、（ ）である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

柊夜子の答え

『俺』

教師のコメント

科学者大喜び。

昨日はDクラスとの試召戦争で点数を消費した為、本日は補給テストにあてられる。実際、俺の点数なんて、姉に仕掛けられた総合10点程度だったのでこれほど良い機会はない。いや化学は少し点数が上昇しまくってるけど。それはともかく、俺たちの目的はあくまでAクラスであって、Dクラスではない為、設備は必要なかった。その代わりと言って代表が何か条件を出していたが、こちら側は秀吉達と騒いでいたので聞き逃した。

「うーす」

教室の戸をがらりと開ける。俺の席は、秀吉の後ろなので廊下際、前から二番目。

「おはようじゃ」

『ちゃーす』

秀吉の席もとい卓袱台の周りには男子が集まって、教科書を見て悪あがきをしていた。ふふっ、この程度の問題復習なんて必要なぞないわ。どちらにしろ高得点取れないからな、はっはっはっ。

と言う風に考えていたけど、まあ暇だから一限目が始まるまでにその集団に入るの悪くないだろう。

机の上に姉が何故か部屋に置いてあった教科書予備軍を詰め込んだカバンをどさりと下ろし、秀吉達の集団に混じる。

「そーいや、終って秀吉とどういう関係？」

他愛も無い雑談の中、ふと訊ねられた。……うむ、どう答えよう。

選択肢？

「――嫁」

選択肢？

「――旦那」

選択肢？

「――友人」

選択肢？

「――クラスメート」

むむ、これは案外難しいな。どう答えるべきか。じーっと秀吉の顔を確認する。これが……男ねえ……？ そこの女子に怒られるんじゃないか、秀吉？ 大きい瞳に俺の心はぐっと――いかんいか

ん、落ち着け夜子。相手は男だ。なにもうほっ的な展開にもつれ込むことはないだろう？　ここは大穴狙いで昨日見た黒い髪の清楚っぽいAクラスの子や、島田さ——はないない、秀吉の姉だっているじゃないか。姉妹は二人で購入するか、俺？　待て、姉妹では——

「なんじゃ、夜子？　そうじーつと見つめられると恥ずかしいのじやが」

そうだ。この場合は……ハーレムルートを築けば良いんだ！　まあFクラスの子や他クラスの子なら可能……？

「異端者……っ！！」

「落ち着いてください、会長っ！！　彼女らは百合です！　俺達野郎が入って良い領域じゃないです！」

「だがしかしっ！！　会長！！　これは異端審問会に掛けるべきだと——否っ！！　羨ましいでございます、柊が！！」

「落ち着け横溝！　この際終に告白という——」

後ろで物凄く不本意な会話が展開されていたが、俺も我慢の限界。介入してやろうじゃねえか……っ！！

「張っ倒すぞ、てめえらっ！！」

黒覆面と黒マントを着用した彼ら、変態どもに俺は言葉を突きつける。

「張り倒す……？」

「止めろ！　それ以上変な妄想を抱いたら打ち殺すぞ！！」
怖気が走るね。

「やはり……奴は……第三性別《秀吉》では無いのか……？」

「いや、第四性別だろう！　秀吉とは別の——」

「不本意な評価をありがとう！　だがしかし、貴様らのその妄語は夜子さん心身共に心配ぜよ！」

くそ。何なんだ、このクラス。その後の騒ぎは言うまでも無く、監督の先生の船越さんが来るまで続いた。

☆

「俺のこの焼きそばパンに勝れるかな？」

「クリームパンの底力なめんじゃねえっ！」

「いいや、うちの妹が作ったこの弁当こそ最強だっ！！」

流石Fクラス男子。女子がいなくとも楽しげに食事を摂るんだね。ちなみに、秀吉は代表達と昼食を摂る為席を外していて、現在いるのは朝倉や須川などの男子達。

「落ち着こうぜ、お前達。一旦、深呼吸してこれを見るんだ」
須川がとある紙を持ち出した。

【文月新聞】　《二年F組　吉井明久さんのコメント》

僕が小さな頃、祖父がよくこう言っていました。

『明久。泥棒でも何でもいい。一番を目指して精進しなさい』

今、僕は天国にいる祖父にこのことを教えてあげたいと思います。

爺ちゃん……

これで、いいかい……？

以上、

【女装が似合いそうな男子ランキングNO.1】

【こいつにだけはバカと言われたくない生徒ランキングNO.1】

【モテそうな男子（同性愛編）ランキングNO.1】

の三冠を達成した吉井明久さんからのコメントでした。

※尚、女装が似合いそうな男子にノミネートされていた木下秀吉さんは審議の結果、アンフェアであるとの結論に達した為除外されています。

予定されていた第二特集

【須川亮、また失恋！

？ 連敗の裏側にある真実とは！】

りました。

は都合により延期とな

「それがどうした須川？」

誰かがそう訊ねた。

「どうしたもこうしたもあるかつ!!」

「おお、わからんぜよ」

訳がわからないので説明してもらおう為に俺が言ったら、涙目で訴えかけられた。

「第二特集……と書いてあるだろう……？」

「あ、ああ。そ、そうだな」

あまりの迫力に思わずどもる。

「なら何故……、お前が新聞に載ってる……？」

「それより、失恋云々については何も触れないんだね。須川よ」

須川から新聞が回ってきたので、隣に居た朝倉達と一緒に見る。

【文月新聞】 《二年F組 柊夜子さんのコメント》

取材者以下同とする「あの、本当に男子なのですか？ 女子や秀吉ではなく？」

柊さん以下彼とする「勿論です。あ、一応確認しますけど、これはプライバシーの保護で名前や顔は隠されているんですよ？」

同「当たり前ですよ。それで、今日木下君と仲良く喋っていたようですが……何か訳ありますか？」

彼「あーはい、嫁です」

同「あちらに木下君がいますが、旦那さんからコメントはありますか？」

彼「愛してるーっ！」

同「ありがとうございます。では、また今度の取材お願いしますね」

彼「あ、はい。どうぞよろしくお願いします」

以上、

【女装が似合いそうな男子ランキングNO.1】でしたが、木下秀吉さんと同じく審議の結果、アンフェアであるとの為除外されました。

【吸血鬼の正体は意外と可愛い！？】

という新聞部に囚まれた柊夜子さんからのコメントでした。

新聞部一同

『木下君とは仲睦まじく頑張ってください』

一瞬で朝倉と有働が俺から離れた。落ち着け、こんなのでっち上げに決まってるだろう、夜子よ？

「異端審問の用意を！！」

「まっ待ってくれ！これは何かの手違いだ！！」

そう、手違いだ。誰もこんなのコメントした記憶は無い！でっ

ち上げだ!!

「問答無用!! 会長っ!! 準備は調いました!!」

「待て朝倉! お前昨日一緒に帰っただろう!」

「……あー、そういえば記者なんて昨日いなかったな」

「だろう!? ——ハッ!? 背中が爛れる様に熱い!? 待てお

前ら!! 貴様ら同級に対して何の躊躇いも覚えないのかっ!?

くそ、格なる上は!!」

ダッ（制服を脱衣し、トランクスと黒Tシャツのみで教室の外に逃亡する）

「げっ!? 鉄人かよ!」

「柊、貴様、なんというはしたない格好で——」

部屋から出ると数歩で鉄人とエンカウントした。フツ甘い、甘いぞ!!

ガッ

「喰らえっ!!」

鉄人の足を引っ掛けて逃亡。俺の運動神経についてこれるわけが

——

「FFF団総員を上げ、異端者を捕まえろ!」

『おぉーっ!!』

昼休み早く終わってくれないかな!

第三問 (2)

「ぶっ殺せ！ ひーらぎ！
ぶっ殺せ！ ひーらぎ！」

「死ねえええええええつ！」

「夜子ちゃん、俺と付き合ってくれーっ！」

昼休みが始まり、まだ10分。奴ら――鉄人含むFクラス一同――は、血に飢えた獣よろしく俺を血眼にして探してやがる。

だがしかし、姉に鍛えられた俺を捉えられるものは無い！ 性職者からは逃げ切れるかわからないがね。

「夜子かい？」

薄暗い部屋を昼休みの隠れ家と選んだ俺の名前を呼ぶのは――

「学え——ババアですか？」

「失礼な言い方さね」

ババアもとい学園長だった。白い髪に老いた肌そして垂れた……いやこれは言わないのが紳士だろう。

「俺のこと知ってるんですか？」

[illegible]

「知ってるも何も、可愛い生徒さね。当然」

そしてババアの手には……今日の朝から出回ってる新聞部の奴。
さてはコイツまさか今読んでいたな？

昼休みが終わるまで暇なのでからかおう。

「隠している事を全て話すんだな、ババアよ？」

はっはっは、暇だから何でも言って――

「そうさね。まあ単刀直入に言うが、アンタどこから来たんだい？」
……ありゃ、びっくり。キャー夜子ちゃん勘が冴えてるーっ。
まあ冗談はともかく、何故こいつが知っている？

「ははっやだなあ学園ババア。僕が――」

「試獣召喚の完成の材料が何だったか思い出してみな」
試獣召喚ねえ……。確か、化学とオカルトと偶然だっけな。――
ん？ オカルトだと……。まさか……。

「気づいたようだねえ。そう、そのまさかさ」

「――俺の利き手は実は左手だったのかっ!？」
物凄くビックリだ。

「どこからその結論に至ったさね!？」

あー、うん。結構楽しかったからまあいいや。そろそろ、避難するかなー。

俺は部屋から出ようと、学園長に背を向ける。はっはっはっ、別に退学になっても姉の補正が入るだろうから下手に出なくて良いのさっ！

「私は、オカルトを必然的に起こす魔術を究明したいのさ。――夜
子。アンタにはその分研究材料として扱わしてもらおうさね」

第四問 (1)

【〽特別コラム〽 鉄拳人生相談】 『私が諸君の悩みを応えよう』

二年生 H Y子さんのご相談

ああどうしよう。愛しい姉貴が殺せない。鉄拳先生、私には愛しい姉貴がいます。だがしかし、時には愛情が憎悪に変わるのです。ああ殺せない。その人を殺す夢を毎晩見るのですが、どうしても最後には返り討ちにあってしまいます。現実で殺そうにも相手は異世界にいる人なので現段階は殺せないのです。一体どうすれば……っ！！

私はこの気持ちで胸が張り裂けそうです。これは恋かしら。

鉄拳先生のアドバイス

すまない。さきほどまで同性愛の相談で手一杯だった。

そうだな、とりあえずそれは、恋ではないとだけ言っておこう。だがしかし、それは肉親に対する愛かもしれん。とりあえず異世界という定義を教えてもらおうか。二次元か三次元か。日本か外国か。現世と地獄か。それだけ分かればもう少し絞れるのだが。

時にHよ、君は持病を抱えているか？ もし、そうであれば、電話一つで方がつくのだが。

まあ、なににせよ。姉弟もしくは姉妹でも、仲良くすることだな。決して家族間で殺し合いなど始めてはいけない。君が病院と警察に拘束されないことを学園教師一同は願っている。

あの後異端審問会を掛けてきた須川を羞恥に追い込んだ為、士気

ががた落ち……とまでは行かないが多少なりとも下がり、反異端審問会組の人達と吉井や性職者などの主人公グループ不在などの条件が相まって、俺は無事解放された。

ちなみに秀吉は白目、口から泡を吹きながら保健室に担ぎ込まれた。うむ、あれはなんだったんだろう。昼休み終了までにまた蘇生され、屋上に戻ったけど大丈夫なんだろうか？ 夜子さんちよっぱり心配です。

そんなハプニングが多発した今日だったけど、無事テスト潰けも終了し、放課後な現在。吉井がドアを蹴破る勢いで教室に帰還し、代表に詰め寄っていた。多分宣戦布告して、リンチされたのだろう。ちなみに、吉井はバカなので、安易に宣戦布告を一人で行ってしまったようだ。

「……言い訳を聞こうか」

おい、吉井よ。宣戦布告しただけで、袖が千切れかけるのかい？
今は代表に付きっ切りなので、それは心のうちに仕舞っとく。

「予想通りだ」

「くきいー！ 殺す！ 殺し切るーっ！」

「落ち着け」

「ぐふあっ！」

吉井……案外喧嘩弱いのかな。簡単に代表に鳩尾強打されておるぜよ。

「先に帰ってるぞ。明日も午前中はテストなんだから、あんまり寝てるんじゃないぞ」

代表は爽やかに言って、教室を去っていった。

「おう、柊。今日暇か？ 良いアルバイトがあるんだけどさ」

吉井が見事に崩れ落ちてるのを傍目に、クラスメートの須川が声

を掛けてきた。

吉井、ご愁傷様と言葉を捧げるのは間違いじゃないはずだ。

「おう、別にいいぞ。んで、一体どこよ？ 俺、引越したてで場所あんまり知らんぜよ」

学校と、家の往復と、昨晚に姉のお達しで行った公園までしか、俺は場所を知らない。べ、別に方向音痴じゃないんだからねっ！！

「駅前。朝倉とか有働が校門で待ってるから、内容は道中でいいか？」

まあ別にデメリットは労力以外に無いはずだから、アルバイトも良いだろう。この世界と俺の世界は場所だけが変わっただけで特に変異してないからなあ。別にエロゲを買う為にアルバイトしてもバチは当たらないはず。部屋にまだラブレ攻略してないのあったなあ。アルバイト終了次第久しぶりにやるかなあ。ちなみに、俺の全財産は姉から？魔術？と称した変な力により必要次第随時送られてくる金銭だけだ。エロゲを買う為にくれなんて口が裂けてもいえない。

「おう」

二つ返事で返し、教室を颯爽と出て行く。その際、吉井が視線を向けてきたが、まあいいだろう。死なない事を祈っとくよ。

☆

校門にたどり着くと、朝倉、有働、秀吉が居た。

「ほう、秀吉もいたのか？」

「うむ、須川に誘われてのう」

須川、キミは異端審問会の会長としての自覚が足りなさ過ぎるよ。

「オーケー、少し待ちたまえ朝倉。頸動脈をカッターナイフで切られると俺は死ぬ」

「5秒だけ懺悔を聞いてやる」

やはり、恐ろしいクラスだ。流石、Fクラス。友人の死をなんとも思わないなんて。

「まあ、ガチで待て。お前らは男子だけでアルバイト行く気か？」

「行く気もなにも、ワシら全員男子じゃぞ」

「そうだな。なるほど、だから秀吉と柊を呼んだのか」

アレ……？ 何かがおかしい。何で俺が男子と捉えられてないんだ……？

「ああ、そうか。秀吉はともかく、俺は男だからなあ。まあ良い。女子一人と男子四人で行こうじゃないか」

俺は男を強調しながら淡々と言ってやる。満面の凍った笑みは忘れない。抜かりないぜよ。

「まあ良い。とりあえず、皆私服に着替えて、学校前で集合しようか」

「おう、それは良いが」

「でも何故私服に着替える必要があるのじゃ？」

秀吉、ごもつともな質問だ。

「秀吉と柊には女装してきてもらおう」

肝を潰せました。

「まあ、美少女二人と美男子三人いれば面接も余裕だろう」

偶にFクラス男子達の思考が理解できないことがあるのは気のせいだろうか。

「——というわけで、またあとでな」

第四問 (2)

家に帰宅すると、ジャストタイムで支給された少し大きめのTシヤツとこれまた大きめなジーンズが机の上に置いてあった。これは天もしくは姉からの天命が働いているのか……？ まあ女装というのは嫌だが、エロゲの為だ。仕方が無い。

春なので、まだ寒い為、服を着てその上に愛用の黒い毛織の上着を羽織る。ちなみにジーンズは大きいので、脛の部分で折り返す。黒い髪を、普段より色が女の子っぽい水色の髪結び紐でポニーテールにする。

鏡を見て一瞬で沈んだのは無理は無い。

そんなこんなで、もう既に集合していた一同に俺は恒例の言葉をかける。

「ごつめーん、待ったー？」

死ね俺。という意見は間違いいではないはず。

ブハウッ

「おい須川！ 死ぬな！ だ、だめだ。血が……鼻血が止まらない……っ！！」

「だから、妄想は止めろと言ったんだ！ 相手は男だろう！？ 秀吉と一緒に過ちをしてどうするんだよ！」

「二の舞だな」

「――あ、姉上っ！ ちがっ！ その関節はそっちには曲がらない――！！」

「木下あああああっ！！ 俺はお前を――ぐふあっ！？」
簡潔表現。地獄絵図。

ちなみに秀吉の格好は演劇部から持って来たのかワンピース型の

可愛い奴だった。偏に女の子という感じがした。

——喫茶店『ラ・ペデイス』——

『よろしくお願いしまーす』（↑俺達）

「あ、アルバイト？ 良いよ良いよ、可愛い女の子大歓迎。丁度人手も足りなかったしね」（↑店長）

と言う風にトントン拍子で進み、無事面接終了。何か複雑な心情になるのは、男子と気づいてくれなかったからだろう。とりあえず、「ロッカー室で着替えてきて」と言われたので、渡された喫茶店の制服を着衣する為にロッカー室に向かう。

ロッカー室はさほど広くないので、案の定分割された。朝倉有働須川と俺秀吉という風に。

5分程度待ったらすぐ着替えて出てきた。黒のズボンとYシャツに同じく黒のベストを重ねた一般的なギャルソンスタイルでズボンの上に前がけのような黒のエプロンをかけ、首もとに小さなネクタイという感じに身を包まれていた。

「おまたー」

おまたー！！『股の部分』ではないと信じよう。

「うい、俺と秀吉は少しばかり時間がかかるかも知れんから先に店長のところ行ってきてくれ」

「俺、本能のままに行動したい……っ！！」

「一緒に着替えようぜ！」

変態と言う二文字と病院という二文字が脳裏をかすめた。さて、携帯でも常備しとくか。

「覗いたら殺すからな？」

俺はそれだけ言い、秀吉と一緒にロッカー室に入った。

……………ヒラヒラの…………エプロンドレス…………だと…………っ!？
驚きを隠せない。流石にエロゲの為とは言え…………これは…………。

ダッ（俺、ロッカー室から脱走）

『なっ! どこ行くのじゃ夜子! お主だけはワシをちゃんと男と認識して更衣してくれると信じておったのに!』

すまない秀吉! 俺にはもっと崇高なことがあるんだよ!

バタンッ

「店長ー、少しお願いがあるんですけどー」
自分の声帯範囲で最高の猫なで声で店長に話しかける。

「そ、そんな女の子が薄着では…………っ!」
店長の顔が赤いのは俺のスペックのせいという可能性は頭の中で消去する。怖気が走るわっ!

「この上にエプロンだけで…………お願い? お父さん?」
くそっ! これは絶対黒歴史だ! 異世界という状況で無ければ自殺しているところぜよ!

「ディア・マイ・ドウタアアアアアアーッッ!!」
だめだ、理性が飛んでやがる! 俺のさっきの台詞が気持ち悪すぎたのか!?

「世界の真髄は俺の手の中にあり! 姉上に鍛えられた俺は不可能

を可能に変える！ しねええええっ！ そして記憶よ飛べええええっ！！」

店長↓K・O.

☆

運良く店にはまだ人が入ってなかったので、入り口の看板に『現在、コスプレ定員が接待します☆』と書いておく。

秀吉は、俺が渡した巫女服を着衣させた。……姉上……私……このまま死んでも本能でございます……。……

客が来るまで暇なので一人しりとりをしとこう。

「めだか」（↑俺）

←

「買い物カゴ」（↑須川）

←

「御免っ！」（↑朝倉）

←

「ンジア！」（↑有働）

←

「愛じゃ！」（↑秀吉）

←

——カランコロン

←

「いらっしゃいませ！」（↑俺）

ピザみたいな男子二人が入ってきた。そしてしりとりは一人ではなく、皆が入ってきていたのは気のせいだろう。

「おっ、本当にコスプレ……っ!!」

「良かったでござるっ!!」

コスプレ目当てか。くそ、誰だ! こんなコスプレ喫茶みたいなのを書いたのは!! (※俺です)

「二名様ですね? それではこちらへどうぞ」

窓際の席まで案内し、お客さんが席に掛けたところで、秀吉がお冷をトレイに載せて持ってきた。

「どうさんは、お兄ちゃんが大好きなんだよ? では、ご注文がお決まりになりましたらお呼び下さい」 (↑秀吉)

とりあえず、一旦俺と秀吉はカウンターに戻る。秀吉の言った言葉の前半は空耳だろう。

「しりとりは難しいのう」

「ごめん秀吉、俺にはお前の本心が分からない!」

何故しりとりが続行中なんだ。

何故須川と朝倉と有働は何でも料理ができるんだ。

分からない! 分からないよ!

——カランコロン

っと、客が来た。次は……あれ……? 吉井と島田さん……?

「いらっしやいませえ!」

全力で接待。気取られるな俺。ばれたら社会的地位で死ぬと思え!

「少々お待ちを」

刹那俺はカツラを取り出し、秀吉にかぶせる。ふう、これで一時はしのげるか。秀吉も演劇よろしく、場の空気も理解し、ばれないように吉井達を案内してくれる。

「――こちらへどうぞ」

秀吉は出来るだけばれないように声のトーンを変えている。ナイスだ秀吉！

「あ、君かわ――美波！？ その関節はそっちに曲がらっ！？」
「――かわの次に続く言葉は何かしら？」

――カランコロン

おっと、もう少し見てみたいが次のお客さんが来たようだ。

客↓代表と黒い髪の人形みたいな落ち着いた美少女。

夜子やい、落ち着こう。ここは文月学園の人ばかり来るらしいんだぜ？

「いらっしやいませーっ！ 現在コスプレ期間中なので、接客はいつもより凄いです！」

自分でも何を言っているかわからない。

「……雄二（ぶすっ）」

「だあっ！？ いきなり目潰しとは良い度胸だな、翔子……っ！！」

「夫婦仲がよいことで、ではご席を案内させてもらいます」

「籍だど！？ 接客で結婚式までさせ――くそ！ 目がっ！」

「……貴女良い人」

もう接客嫌になってきたよ。

それから数分立たずして、一番初めに来たピザ二人組みの注文が決まったようなので、俺が向かう。

「ご注文はお決まりでしょうか？」

満面の笑みを顔に貼り付けて言う。別に、この人たちを生理的に受け付けないわけではない。

「中華料理のお勧めを二人前、コーラ二つで」

キミ達はここをどこだと思っているのだい？ 喫茶店で中華料理になんてあるはず――

グッ（須川が親指を立ててこちらにニコツと笑顔を向けてくる）

俺の偏見だったようだ。

「畏まりました。ご注文の確認ですが、中華料理二人前とコーラ二つですね。少々お待ち下さい」

メモを取り、俺は須川に紙を渡す。

「任せとけ！」という言葉とともに料理の準備を始めた須川の後姿は心なしか、いつもと違っていた。中華料理に並々ならぬ思い入れがあるのだろうか。

第四問 (3)

ラッシュも過ぎ、一段落が着いた喫茶店。中華料理が反響をよんだのは少し分らないが、思いのほか客には好評だった。最初は秀吉目当てのコスプレ見学の客が多発だったが、本当に俺の作った創作デザートやジュース、須川が作った中華料理、朝倉と有働の作った喫茶店で出される品々が思わぬほど好評で、途中から風の噂でコスプレ喫茶兼美味な中華料理店とまで囁かれたほどだった。

そんな折、もうじき店じまいの時とある災害が訪れた。災害というのはツイントールが特徴な、女の子。試召戦争で見かけたような気がするけど気のせいだろう。

「お、お父さん! ? 家に帰ってきてみれば……っ!! まさかこんなコスプレなんかに手を染めて……っ!! !」

「ち、違うんだ! 美春、落ち着いてお父さんの話を聞いて……?」
「そういえばコスプレ持ち出したのは俺だったなあ。やだな、店長。そんな俺にしか聞こえないような声で「やばい! マジやばい!」お前が言い出したことだろう! ? 早く弁解してくれ!」を連呼しないで下さいよ。

「――ハッ! ? まさかアナタ……」

ツイントールの子が不意にこちらを向いた。おい店長。あからさまに安堵のため息つかないでくれるかな。俺物凄く面倒ごとに巻き込まれそうなんだけど。

「……お姉さまと呼んでよろしいですか……?」

「ごめん、文のつながりがおかしいと思う。」

「き、貴様っ! ? まさか最近うちの娘を誑かす学校の少女とはお

ま——」

「何たるお姉さまに対する無礼な口事！ ささ、お姉さま、私の部屋でゆっくりとしていてくださいな」

お父さん可哀想に。

『秀吉、助けて』アイコンタクトで秀吉に救援を求める。これもそれ、Fクラスだからこそ出来る特技。

『頑張れ』思わぬ須川から返事がきた。誰もお前には求めちゃおらん。

『どうしろもこうしろも、ワシには分からんのじゃ』くそ、流石に秀吉とて面倒ごとには首をつっこまないか。

「あーごめん。俺用事があるからさ」

「お姉さまが何という言葉遣い！？ そんな……美春……大シヨックです……」

いっけね。素のまま返事しちゃったぜい。まあいいか、別に給料さえもらえればね。悪者？ 褒め言葉です。

「……折角、美波お姉さま以外の貧乳美人と会えたのに……」
妙に呟いてる言葉は怖気が走った。

「そんな子のどこが良いんだ！」

「黙りなさい！ 豚野郎！」

「酷い！ お父さん大シヨック！」

「そもそも（強制終了）」

☆

「ラストのは驚いたけど意外と良いアルバイトだよなー」
朝倉が帰り道呟く。

「だな。……それにしても今日は寒いのが」

今度は俺が言う。真面目に寒い。Tシャツと毛皮の上着だけだからな。ちなみに下半身が裸という意味ではない。ちゃんと下にはジーンズをはいている。

それから夜の道、5人で仲良く雑談する。

「柊夜子から始まるっ」（俺のコール）

『いえーっ!』（秀吉と須川と朝倉と有働の合いの手）

「古今東西っ」（俺のコール）

『いえーっ!』（秀吉と須川と朝倉と有働の合いの手）

「最近何かと囁かれている噂!」（俺のコール）

パンパン↓秀吉

「ワシと夜子の仲じゃ!」

「何故恥ずかしげも無く断言する!?!」

パンパン↓須川

「木下と柊は実は女!」

「おいこら待て、オーケー、女という噂があっても……否! ダメ! そして何故俺と秀吉ネタが多い!?! まるで夫婦——」

「……照れるのじゃ」

「ダメだ! 秀吉! そこで照れちゃダメ!」

パンパン↓朝倉

「横溝がこないだ木下に告白して玉砕した。そして今度は柊告白しようとしている」

「ええ！？ それマジで！？ 俺嫌だそんなの！」

「もしかして……ワシのためにかのう……？」

「秀吉、落ち着こうぜ。俺たちは男だ」

パンパン↓有働

「俺は、BLは有りかと思う」

「ダウト！ それダウト！ 噂じゃない！」

パンパン↓俺

「く、くそ！ 俺は女子にモテる！」

『罰ゲーム決定！』

「何故だ！？ 何故俺だけ！？」

くそ、何故有働のが良くて俺のはダメなんだ。

「夜子に受けてもらう罰ゲームはどうするかろう」

できれば軽いのでお願いします！

「柊ねえ……、そうだな……好きな女子っている？」

「朝倉、それは間違いだ。それでは百合になってしまう」

本当にFクラスは恐ろしい。クラスメートの性別を間違えるなんて。

「んじゃ、好きな男子はいる？」

「その場合の好きなのという定義を教えてください。恋愛感情か交友感情か」

「どちらでも」

「待て須川。それは早計だ。恋愛感情にしとけ」

男子に恋愛感情抱いてる男子クラスメートがいたら嫌だろう。そして何故俺は男子が好きとなっている。

「秀吉」

「わ、ワシもじゃ!」

秀吉がノってきやがった。

「ぶっ殺すぞ」

「な、何でじゃ! お主も言うたかろうに!」

「あーそうだな、でも何故か秀吉が言う恋愛感情としての話に聞こえるから」

「……ぽ」

「歯あ食いしぱりやがれえっ!」

「柊がご乱心だあああっ!」

見た目美少女として俺は男子は好きならん! 女子が好きなんだ!

☆

「そうじゃ、夜子。これから用事はあるかの?」

「無いが……何故だ?」

先ほどの後なので思わず訝しんでしまう。流石にあの後じゃあねえ?

「特に意味は無いのじゃが、強いて言うならうちで料理をして欲しいのじゃ」

「何故料理。秀吉は出来ないのか？」

「うむ、苦手なのじゃ」

「意外だな」

須川が口を挟む。確かに意外だ。演劇部所属していたし意外と手が器用と思ったのだが。

「今夜は両親がおらなくてのう、姉上しかおらんのじゃ」

「そういや俺、秀吉の姉貴見たことねえや。可愛い？」

ふと、気になったので聞いてみた。確か腐女子って書いてあったよな、あの血みたいな色の字で綴られた紙に。はてさて、可愛いのか。一卵双生児並に似ているってあったけど、どうなのかね。

「おう、可愛いぞ」

渋る秀吉の代わりに須川が応える。

「オーケー。んじゃ行こうか」

それから須川達に別れ際秀吉は「気をつけてね」と言われていたのには驚きを隠せなかった。恐るべし、Fクラス。俺が男子に手を出すと思っていたのだろうか。

第四問 (4)

そんなこんなで秀吉の家。あそこまで真摯に頼まれたら流石に行かなきゃ男じゃないぜよ。おっとその君、記憶の捏造とか言うなよ？ あれは秀吉からの真摯な頼みごとなのだ。

「料理してくれって言われても俺はあんまりできないぞ？」

「喫茶店の時みたいにしてくれたらいいのじゃ」

ギイイイツ——パタン。

「どうしたんじゃ？」

後ろから秀吉が声をかけてくる。ちなみに、扉の先はリビング。

「いや……何か見てはいけないものを見てしまった」

「どれ、ワシが先に行ってみようぞい」

ギイイイイツ——

「あ、姉上っ！ 何でそんな格好——ちがっ！ そっちにはその関節はまがらな——っ!？」

扉から聞こえる秀吉の声。向こうでは何が広がっているんだろうか。知りたいけど怖い。日本人とは思議なもので怖いものほど知りたくなるのだ。

ギイイイイツ——パタン。

秀吉の関節が逆に曲がっていたのは気のせいだろうか？

「ほら、そのポニーテールの子入ってきなよ。秀吉が連れてきたってことはまさか彼女？」

いいえ、ケフ——失礼。彼女ではございません。

ギイイイツ——

部屋の中に入ると、秀吉と瓜二つな少女が下着姿でいた。流石にエロゲで見慣れているとはいえ、現実だと少し興奮してしまう。床に関節が逆に曲がっている秀吉との姿はシュールだが。

姉貴Ⅱおっかない人

そういう認識をしている俺はつい本能的に挨拶した。

「私め、本日限り秀吉様に御達しの上、料理をお勤めいただきます。夜子と申します。以後お見知りおきを」

床で正座し、ははーっという感じに頭を下げる。

「そう、料理ね。食材は冷蔵庫の中に入ってるから用意していいわよ」

そう命令を受けたので、早速調理に向かう。食材、食材と……。

……………。

これで俺にどうしろと？ 何故バナナしか冷蔵庫に入っていないんだ。おかしい。普通の一般家庭ではバナナ主食という概念は無いはず。あるとしたら、かのエロゲに出てきたバナナが大好きなわんこ嬢こと美春だったはず。ああ、チョコバナナ食いてえー。

「あの、優子様。食材はバナナで宜しいのでしょうか？」
「構わないわよ」

何故だ！ 何故こうもすんなり了承される！？

「夜子よ、別にできないならばできないでいいのじゃぞ？」
秀吉や、男には譲れないものがある。姉上に鍛えられた俺の料理
テクニク……とくと見よ！」

☆

「おおー、あの材料でこんなのが出来るとは……世も末じゃのう」
「おーっ、秀吉の彼女は料理がうまいのね」
俺の料理スキルを最大に生かしてできたバナナ料理達を見て、感
嘆としている二人。フツ褒められちゃ照れるぜよ。

「ああ、中身は保障できないがな！ 時に優子様。私めは秀吉の彼
女じゃないぞ」

「え、そうなの？ 秀吉に女の子の友達なん——」

「ちなみに男」

くそ、ポニーテールの影響かつ！ 恐るべし、ポニーテールっ！

「……っ！？ ひーでーよーしー……？ ちよつと良いかしら……
？」

「なんじゃ、姉上？ いきなり腕を持って何故リビングから出て行
くのじゃ？ 料理はもうできるかのうに」

ああ、秀吉。君はリビングから出て行ったら、ここに戻ってこれ
ない気がするよ。

『アンタ、何で男の子が来たって言わなかったの？』

『はっはっはっ、そんなの人目みりゃわかるじゃろ。それにしても、
何でそう下着姿から着替えるのじゃ？』

『私は学校では優等生として演じなければならぬの。わかる？』
『姉上は優等生演じるともかく、音痴だから——姉上っ！ だから

その関節は——っ!!』

パタン。

「さて、食べようかしら」

秀吉の姉が妙に涼しい顔してリビングに戻ってきた。手は返り血を浴びている。そして、服を着衣していた。少し残念。

——……、フッ……俺が媚薬を入れるのを怠るとでも……？

「色々種類があるわね。貴方は何がお勧め？　　というかそこにずっと立っていないでこっちに座って食べなさい」

優しい言葉をかけられる。だめだ！　俺の良心よ！　永久に眠れ！　俺はゆっくりと秀吉の姉の隣の席に着く。大丈夫、良心は眠っているから。

「えっと、そのバナナを揚げたやつです」

バナナを揚げた奴↓媚薬入っていない。

俺のバカっ！　こんな美少女に媚薬飲ませなくて何が男でい!？

「ほう、結構美味しいわね。旦那にもらいたいぐらいよ」

「ありがたきお言葉」

ダメだ、良心が蘇ってきた。眠れ！　眠れ！　良心なんて眠っちゃまえ！

パタンッ（秀吉復活）

「お、秀吉大丈夫だったのか？」

「大丈夫じゃ。それより夜子の料理はまだ残っておるかの」

「そこまで食いたいのか？」

「今日の昼飯は少し酷かったからのう」

秀吉はそう言い、顔を歪める。なるほど、昼飯で何か起こったから保健室に担ぎ込まれていたんだな。

ヒュッ（秀吉が箸をのばす音）

パシッ（優子様が秀吉の箸をはじく音）

ヒュッ（秀吉が箸をのばす音）

ベキッ（秀吉の箸が粉碎される音）

「何故じゃ！？ 姉上、何故わしには……！？」

「黙りなさい、秀吉。これは戦争よ」

おかしい。良心がいつまでたっても死なない。死ね、良心！

「甘いぞっ、姉上っ！」

「秀吉っ！ まさかアンタがここまで力をあげていたなんて……っ！」

くそ！ フェニックス如き再生力を見せるんじゃない！ 死ね良心！

心！ 永久に眠れえええっ！！

シュパッ！（秀吉が媚薬入りバナナチョコを箸で掴む音）

スサッ！（優子様が秀吉の箸を妨害しようとし、外す音）

今日はもうだめだ。寝よう……。

俺はそう思い、秀吉の家から去った。

さようなら、俺の野望。

『ひ、秀吉！？ アンタ何食べたの！？ 目が虚ろだし！ 何でさ
つきから妙な事唱えているの！？』

そんな出る際に聞こえた声に、罪悪感が伴ったのは多分気のせい
だろう。

第五問 (1)

問 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希の答え

『C 6 H 6』

教師のコメント

簡単でしたかね。

柊夜子の答え

『C 6 H 6 Ⅱ 子供 6 人・えっちい事 6 回』

教師のコメント

難しすぎましたかね。

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立つ代表が教卓に手をつき俺たちのほうに向いている。

本日も午前が全部テストに割り当てられて、丁度さっき全科目のテストが終わり昼食が終了したところだ。総合科目勝負を昨日やったもんだから、補給テストが多く面倒だったのが感想。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分

か？」

『おおーっ！』

一昨日から一向に下がらないモチベーション。おバカな集まりのクラスにとつての武器の一つと言ってもいい。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『おおーっ！』

「そこで、前衛部隊は姫路瑞希に指揮を取ってもらう。野朗共、きっちり死んで来い！」

「が、頑張ります」

姫路さんがハイテンションがマイペースな男子についていけないのか、若干引き気味に一歩前に出る。そんな小動物な仕草が可愛いと思うのは俺だけじゃないはず。

『うおおーっ！』

今回は廊下戦で勝ちに行き、教室まで駆け抜けることを目的にしている為、絶対に廊下戦では負けられない。よって、戦力もFクラス五十数人中四十人をつぎ込む。その中には当然、学年首席レベルの姫路さんや中華料理に並々ならぬ事情がある須川、演劇部のホープの秀吉、バカな吉井、ぺったんこの島田さんが含まれる。ちなみに俺は教室待機。俺が代表に頼んだ。渋々だが了承してくれた。

キーンコーンカーンコーン

昼休み終了のベルが校内に鳴り響く。これでBクラスとの試召戦争の開始である。

「よし、行ってこい！ 目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー！』

姫路さん率いるFクラス大半はほぼ全力でBクラスへと向かう廊下を駆け出した。若干姫路さんが遅れをとっているが、許容の範囲だろう。

さて、これで暇になるな。

「柊夜子から始まるっ」（俺のコール）

『いえーっ！』（朝倉と有働の合いの手）

「古今東西っ」（俺のコール）

『いえーっ！』（朝倉と有働の合いの手）

「最近のエロゲは——」

「お前ら、今試召戦争中だぞ？」

俺らが古今東西しているといきなり人が入ってきた。あれは、多分Bクラスだろう。

「Bクラスが何の用だ？ まさか一人で俺を獲りに来たのか？ それとも取引か？」

代表が一步前に出てそう告げる。一人で代表を獲りに来るはずなんて無いはずだから……大方取引だろう。Fクラス10人程度とB

クラス1人じゃ間違いなくFクラスに軍配が上がるだろうし。

「取引だ」

顔に焦りは見えない。危害を加えられないとでも思っているのだろうか。

「生かして帰すな、野朗共！」

代表が命令で、素早く俺達はBクラス生徒を包囲する。

『ここまで来て無傷で帰れるとでも思ってたのか？』

『補習室！ 補習室！』

『殺せ！ 殺せ！』

ダメだ、皆テンション上がりすぎておかしい。

「お前らにとっても良い取引だと思うがな」

ここまで包囲されても焦りを見せない。んー、これは勝てるのも思ってるのかね。

俺はBクラス生徒に近づき、「吸血鬼って誰か知ってるか？」と訊いて、にやりと笑ってやる。新聞部のほうで色々と有名になってしまったからな、俺の性職者に並ぶ二つ名がね。ちなみに新聞部で有名になったのは名前だけで顔写真は出ていない。

Bクラス生徒は少しずつ焦りを見せる。大方、負ける可能性でも考えたんだろう。

一応牽制はこれで良いだろう。あとは代表が取引で良い具合に結んでくれたら良い。

「……、取引の内容を聞かせてもらおうか」

代表は少し悩んだ後、取引について訊ねる。

☆

「……うわ、こりゃ酷い」

「まさかこうくるとはのう」

「卑怯、だね」

教室に帰ってきた吉井達の第一声はそれだった。眼前の光景は穴だらけになった卓袱台とへし折られたシャープや消しゴムである。俺も代表と一緒に取引に行って帰ってきた時にはその感想を隠せなかった。

正直に言おう。誰だ、こんな地味な嫌がらせをやったのは。

「酷いね、これじゃ補給がままならない」

「うむ。地味じゃが、点数に影響の出る嫌がらせじゃな」

「あまり気にするな。修復に時間はかかるが、作戦に大きな支障は無い」

「雄二がそう言うならいいけど」

作戦については俺はあまり知らないのだが、ここで口を挟むなんて野暮ってもんだろう。敵の盗聴器の心配もあるし。それにしても、高校生で盗聴器とは……、まあ俺は中学生だったけど。実験に必要な不可欠な機材だったのです。

「それはそうと、どうして雄二は教室がこんなになっているのに気づかなかったの？」

もっともな吉井の質問。本来ならいるはずの代表含む、10人程度男子達がこんな嫌がらせに気がつかないはずがない。

「協定を結びたいという申し出があつてな。調印の為に教室を空にしていた」

実際は、不穏な空気を察知した俺が朝倉に待機してくれと言って待たせていたが、Bクラス生徒に殺られた。南無。

「協定じゃと？」

「ああ。四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きを明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。ってな」

「それ、承諾したの？」

「そうだ」

「でも、体力勝負に持ち込んだほうがウチとしては有利なんじゃないの？」

「姫路以外は、な」

意外と優しいのか代表。戦力だけで言っていたら最悪だが。

「あいつ等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。そうすると、作戦本番は明日ということになる」

「そうだね。この調子だと本丸は落とせそうにないね」

「その時はクラス全体の戦闘力よりも姫路個人の戦闘力が重要になる」

「だから受けたの？ 姫路さんが万全の態勢で勝負できるように」

「そういうことだ。この協定は俺たちにとってはかなり都合が良い」

一応、条件が良いように取引をしたが……もしも、向こうの奴が卑怯な手を使ってきた場合はどうする気なんだろう。例えば、姫路さんが何かを人質にとられて戦えないとか、他のクラスと向こうが隠れて交渉していたりと。今まで数々の死線を乗り越えてきた俺には色々予想できるぜよ。

「姫路さん、何か大事なものを落としたりしていない？」

気になったので訊いてみる。俺だって、もとの世界に帰りたい。

そのために出来るだけ危険分子は削除しておきたい。

「そうですね……。……でもあれは……」

何か物凄く言いたく無さそうだ。ここは乙女心を察してあげて…

…。

「生理とか……？」

神妙な面持ちで訊いて見る。別に下心はない。

「吉井、セクハラがいるぞ」

「了解、有働君。皆カッターナイフの準備は良い？」

『いや、召喚獣を戦死させて補習室に連れて行けばいいんじゃないか？』

『それもそうだな——試獣召喚』

有働、貴様……っ！！ それにしても何故鉄人は止めない。

「くそ！ 試獣召喚——痛い！？ 肩に鋭い痛みが！？」

召喚獣の肩にももの見事に投擲されたカッターナイフが刺さっていた。

「それ……もしかしたら、《観察処分者》のフィードバックじゃないの？ ……でも《観察処分者》は僕しかないはず……」

「《観察処分者》ってなん——」

スパッ

血が頬を伝い地面に一滴落ちる。

相変わらず恐ろしい奴らだ。俺を殺す気でいやがる。

「よし、俺は前線に行く！」

俺はそう告げ教室を駆け抜ける。後ろからカッターナイフが数十本投擲されたが、自立活動した俺の召喚獣の羽によって全部残らず打ち落とされる。ナイス俺の召喚獣！

第五問 (2)

「よく来てくれた、柊！」

「ダメだ須川！今はそれ所じゃない！何故か後ろから鉄人だけが追っかけてきているんだ！」

くそ……っ！？何故鉄人が俺を付きまとう！？

ちらり――

『俺はお前を求めている』

ダメだ、違う。鉄人はそんなことをアイコンタクトで伝えたいんじゃない！

……、だめだ……振り切れない……っ！！

俺はそう確信し、渡り廊下で鉄人と向き合う。

そして――

「試獣召喚っ！死ねえっ鉄人！」

足元に幾何学模様が展開される。システムが起動した証。

「なっ……っ！！」

流石の鉄人も驚きを隠せないようだ。ちなみに、普通の召喚獣は物に触れないらしいが……、さきほどのカッターナイフで分かったように何故か今は触れるみたいだ。

スカッ

……あれ？

「Bクラス金田一裕子いきます！」

「私もいきます！」

くそ、鉄人が目の前にいるのに……っ！！ 物凄く歯がゆい。

『Bクラス 金田一裕子 里井真由子 VS Fクラス

柊夜子

物理 152点 145点 VS

300点 』

「なっ！？」

「そんな！？ Fクラスが300点も！？」

「あのクソ野郎もとい姉のせいで色々潜入させられた俺の学力なめんじゃねえ……っ！」

Bクラス程度では俺を止められん！ 勝負は一瞬、俺の召喚獣が相手の召喚獣の間を駆け抜けるだけで終わった。ちなみに、自立活動してらっしゃって俺の操作では無いのは言うまでもないだろう。

『アイツが吸血鬼かつ！』

『吸血鬼が出てきたぞ！ 人質でも何でも良いから自分を守れ！』

『……あの子……本当に男か……？』

『ああ、確かに可愛いが、吸血鬼だ！』

向こうは向こうで騒いでるみたいだが俺には鉄人が……っ！

「柊、お前今——」

「甘いぞ鉄人！」

ズッ（鉄人の足元に滑り込む音）

パシッ（鉄人の足を払う音）

ドンガラガッシャー（鉄人が転がっていく音）

『吸血鬼がBクラスに向かうぞ！ 何としても抑えろ！』

『残っているのは6人だ！ 4人がかりで守るぞ！』

『オーケー！ 鈴木、俺達はこのポニーテールの女を人質にするぞ！』

『吉田、お前は召喚獣を人質にしてくれ！』

フッ……高だかBクラス4人程度など俺には勝てぬわ！

点数を吸うのも億劫なので4人を一気に潰す。駆け抜けるだけで何をしているのか全く理解できない。

『ダメだ！ 奴は根本を狙っているぞ！』

『あああっ！！ 補習室は嫌だあああっ！！』

『ウェルカム』

鉄人、ちゃんと仕事をしてくれたんだね！ さらに鉄人よ！

☆

不思議だ。ああ不思議だ。何故俺はこんな所にいるんだ……？

「船越先生に追っかけられたと思ったら何故目の前に、妖怪が……？」

「失礼さね、アンタが私の姿を見ようとここまで来たんじゃないの

かね？」

「学園ババア、備考つと。自意識過剰とね」

「アンタ退学にされたいさね!？」

フツ……場所というのはここ、名前は知らんが学園長がいつもいる場所。毎回窓からしか入ってないから正しい場所知らないけど。

「学園ババアは俺を退学に出来ないはず。何故ならばそれは、この学校は世間から注目を浴びていて、そこで退学生徒なんて出したら世間の印象が悪いからな!」

ちなみに即興で考えた。

「そうさね。それも正しいけど、他にも理由はあるね。まあ、それは今度の機会ということ。……ほれ、それがアンタの腕輪さね」

ひょいと物が飛んでくる。緩やかに放射線を描きながら俺の手元までうまく届いた。

「それは試作品。今度の清涼祭の優勝商品である白金の腕輪の試作品だよ。効果は自由に物体に触ったり触らなかったりできる。《観察処分者》って知ってるさね？」

《観察処分者》といえばさっき吉井が言ってたやつかな。

「知らん」

断言する。知らないものは知らないし。

「学生生活を営む上で問題のある生徒に課せられる処分さね。基本的には教師の雑用係で、雑用をこなすため、観察処分者の召喚獣は特例として物に触れることができるよね。その代わりと言っちゃ喚獣の受けた痛みや疲労は召喚者にフィードバックされるけど」

「――夜子。身に覚えがあるだろう？」

「……ああ！ カッターナイフの件ね」

あぶねえ、鉄人と船越先生（四十五歳♀独身）に追いかけられて
て記憶が飛んでたぜよ。

「そうさね。アレはちよいと体験してもらおうと私がやったわけだ
よ」

「えらく迷惑なことをやるんだね、学園ババア」

「まあ、それを手につけて《顕現^{エビファニー}》と言えば発動さね」

「うわ、ダサくない？」

あー、何か言いたくないぜよ。そんなこと。

「アンタ以外にはつけられんのさ、それ。だからありがたく頂戴し
な」

その後、少しばかり質問されて解放された。俺にとってのメリッ
トはあんまり無かった気がするのは気のせいだろうか？

第六問 (1)

問 以下の問いに答えなさい。

『good および bad の比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希の答え

『good | better | best
bad | worse | worst』

教師コメント

その通りです。

柊夜子の答え

『ぐっど | ベたー | ベすと』

教師コメント

せめて平仮名はやめましょう。

そんなBクラスとの取引が実行され無事帰宅し就寝したわけだが、今朝、俺を待ち受けていたメールとはいうのは――

【message from 坂本雄二】

明日、学校の女子制服持ってきてくれ。秀吉のサイズに合うやつな。

である。彼は俺のことをなんだと思っているのだろうか？　そしてリビングに入ると謀ったように女子制服が置いてあった。これで俺も変態への道第一歩っと。

持っていくのが憚れる品だが、これもそれ。俺が元の世界に帰る為。背に腹は変えられぬ。

誰もいないところで代表に赤と黒を基調としたブレザータイプの制服を渡す。その際に、少し哀れみの死線を向けてあげたのは間違いいではない。

☆

「ドアと壁をうまく使うんじゃ！　戦線を拡大させるでないぞ！」

秀吉の指示が飛ぶ。本日は昨日の交渉通り午前九時よりBクラス戦が開始され、場所は中断された場所から進軍を開始した。

代表の指示は一つ。『敵を教室内に閉じ込めろ』とのこと。

ここまでは順調だ。だがしかし、現地で指示を出しているのは秀吉だけだ。というのは、秀吉は副司令官であり、本来指揮を取るはずの姫路さんが指示を一向に出さないし戦わないのである。

俺の予想の一つが当たったようだな。だから昨日ちゃんと聞いただろうに。

「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！　補給も念入りに行え！」

始まってから数時間、ちゃんと代表の指示通りにことは進んでいるが、こちらの主戦力たる姫路さんが活動しないことにはこれも時間の問題だ。代わりに俺が行ってもいいんだけど、それじゃあ主人公の活躍を奪っちゃう。原作に従順なんですね。

「左側出入口、押し戻されています！」

「古典の戦力が足りない！ 援軍を頼む！」

まずいな。左の出入り口のほうが押し返されている。ちなみに担当教科は古典で竹中先生という人。健気にもカツラを所持している。

おっ、吉井が押し返されている部分に向かっていく。

『……ツラ、ずれてますよ』

『っ！！』

読唇術の限りこういう会話だ。姉の実験で得たスキルは多彩である。

すると、頭をおさえて周囲を見渡し、どこか決心したような表情になる竹中先生。

「少々席を外します！」

去っていった。やるね、吉井。

「古典の点数が残っている人は左側の出入り口へ！ 消耗した人は補給に回って！」

俺は壁際まで行き、観戦。確か一回読んだ限りでは俺が入らなくても勝てるはず。変に介入すると、勝てる戦争も勝てなくなっちゃうからのう。

『姫路さん、どうかしたの？』

『そ、その、なんでもないですっ』

姫路さんは小動物よろしく、必要以上に首を振る。嘘が下手くそと思ったのは俺だけじゃないはず。

『そうは見えないよ。何かあったなら話してくれないかな。それ次第では作戦も大きく変わるだろうし』

『ほ、本当になんでもないんです!』

「右側出入り口、教科が現国に変更されました!」

「数学教師はどうした!」

「Bクラス内に拉致された模様!」

左側右側と両方文系にチェンジされる。どうやらBクラスは文系が強いみたいだ。

「私が行きますっ!」

姫路さんがやっと動いた。だがしかし、

「あ……」

急にその動きを止め、俯く。

姫路さんの視線の先には意地の悪そうな生徒。その手には何か封筒がある。一見、アレはただの封筒に見えるが、どうやら姫路さんには違う模様。

『……なるほどね。そういうことか』

吉井も気づいたらしい。本当に極わずかの人にしか聞こえない程度の声量で呟く。

「姫路さん」

「は、はい……?」

「具合が悪そうだからあまり戦線に加わらないように。試召戦争はこれで終わりじゃないんだから、体調管理には気をつけてもらわないと」

「……はい」

「じゃ、僕は用があるから行くね」

「あ……!」

吉井は、姫路さんに背を向けて駆け出す。方向は教室。そして呟

く。

『面白いことしてくれるじゃないか、根本君』

それだけで充分だったな。俺が動く理由。若い男女の恋話に一枚
噛んでやろうじゃねえか。

第六問 (2)

「現国の点数が残ってる奴は全員右に回れ！ 左は俺だけで十分だぜよ！」

吉井が現場から去って、すぐさま俺は指示を出す。ほとんどの奴は俺の実力を知っている為すぐ動いてくれた。その他の人は秀吉がちゃんと指示を出してくれた為動く。

「あ、あの……っ！ 私は、どうすれば……っ！」
今にも泣きそうな顔で俺に訊いてくる。

封筒の中身は十中八九、ラブレター。多分吉井宛だろう。周囲から見てもわりやすいからのう。

そんなもんを人質にとられりゃ、年頃の女の子には判断がつかないだろう。クラスの皆をとるか、自分をとるか。

「あー、後ろで待機しといってくれ。愛する吉井が帰ってくるまでな」
意地の悪い笑顔で言ってる。すると姫路さんは「はうっ……」
みたいに顔を真っ赤にさせて俯いた。
羨ましいね、吉井。

☆

代表率いる本隊が出てきて、圧倒的には言わないが結構有利な戦になってきた。勿論左側出入り口の担当は俺だけだが。

春先なのに暑苦しいのは人ごみだけのせいではないだろう。何でか冷房機がついてないみたいだし、Bクラス代表の好みの環境？

そんな風に考えていながらずっと吸血行為、俺の召喚獣の点数うなぎのぼりである。相手する奴が気の毒になっていくがいかなせん、敵は敵。気にしないぜよ。

——不意に相手さんの代表が口を開いた。

「お前らしい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって。暑苦しいことこの上ないっての」

顔と性格が汚ければ、声も汚いらしい。物凄く耳障りな音が耳に届いた。

「どうした？ 軟弱なBクラス代表サマはそろそろギブアップか？
こちらは我らが代表。つくづく、相手を逆撫でするスキルに長けている。別に悪い意味ではないぞ。」

ドオンッ——と壁をとてつもない力で叩く音が聞こえる。隣で何やってんだか。

「はア？ ギブアップするのはそっちだろ？」

「無用な心配だな」

「そうか？ 頼みの綱の姫路さんも調子が悪そうだぜ？」
瞬間、周囲の人がざわめいた。流石Fクラス。伊達に、クラスメイトを殺すのに躊躇いが無いのに女子だけは大切に扱っていない。ちなみに、大事な部分を省略して相手さんが姫路さんに何しているかちゃんと男子達に伝えている。

「……お前ら相手じゃ役不足だからな。休ませておくさ」

「けっ！ 口だけは達者だな。負け組代表さんよお」

「負け組？ それがFクラスのことなら、もうすぐお前が負け組代表だな」

ドオンッ——またしても壁を打撃音。

「……さつきからドンドンと、壁がうるせえな。何かやっているのか？」

「さあな。人望の無いお前に対しての嫌がらせじゃないのか？」

「けっ。言ってる。どうせもうすぐ決着だ。お前ら、一気に押し出せ！」

「……態勢を立て直す！ 一旦下がるぞ！」

代表の命令で、一気にFクラス全員が引く。俺もそろそろ引かないとな。

「どうした、散々ふかしておきながら逃げるのか！」

時刻は午後の三時ジャスト。逃げる傍目に代表が音がする方向に向かって――

「あとは任せたぞ、明久」

そう言っていた。

☆

背後から追いかけてくるBクラス生徒達、計15人程。陸上部に所属している人がいるのか、何人かは結構早い。このままいくと、代表が追いつかれる可能性もある。

ということで、俺は残る。最後尾なので、誰も気づいていないと思うが。

「Fクラス終。この場にいるBクラス全員に古典の勝負を申し込めます」

丁度ヅラの整備を終えたのか、その場にいる竹中さんに言う。

「即行で潰して、Fクラスの雑魚代表を獲るぞ！」

『おうっ！』

向こうは向こうでテンションが高い。結構てこずるかのう。

「試獣召喚！」

『試獣召喚っ！』

『Fクラス 柊夜子

古典 1200点』

Bクラス生徒の点数が表示される前に明かされる俺の点数。もう化け物の類だ。

それでも、200点かそらのBクラス15人が相手だと、流石にてこずる。単純計算相手の点数は3000点だからな。吸血している最中に多分狙われるだろうし。さて、どうするか。

「――試獣召喚！」

背後で声が聞こえた。この声質は有働。

そしてその後に続く、秀吉と数人の男子。

『試獣召喚！』

不意に顔がにやけてしまう。誰の差し金なんだか。感謝するぜい、代表。

「Bクラスに勝って飯食いにいくぞっ！」

誰かがそう言い、Fクラスの士気が更に上がる。

「俺は肉！」（↑Fクラス男子A）

「塩タン！」（↑Fクラス男子B）

「何でもいい！」（↑俺）

「わ、ワシも何でもいいのじゃ！」（↑秀吉）

なぜだろう。一瞬秀吉が俺に合わせたような気がしたが……。まあ気のせいだよね。

「即行で終わらせて飯食いに行くぞっ！ 誰も鉄人に捕まるなよ！」
『当たり前だっ！』

クライマックス染みた勢いで、Fクラス一部 vs Bクラス一部が始まった。

第六問 (3)

「終わったぁーっ！」

Bクラス代表が性職者に討ち取られたという朗報を聞き、俺は地面に崩れる。周囲を見ると、全員座っていた。誰も欠けていない。

Bクラス生徒15人は全員泣きそうな顔で、立つか倒れている。倒れている人は物理攻撃で倒れたのではなく、俺達Fクラスに戦争を負けたからである。流石に、Fクラス的环境下で過ごすことになる。とそれぐらいのリアクションが妥当だろう。

「……くっ……流石吸血鬼……っ！」

「まさかあれほどの力を持つとは……っ！」

「……お前なら奴を倒せるだろう……、敗れた俺達の為魔王を討つてくれ……」

なんのこっちゃ。意外とBクラス男子はノリが良いかもね。がり勉ってイメージがあったけど。

「……柊さん……私……っ！ この度の戦争で貴方に惚れました……っ！ 握手してください！」（↑男）

「だが断る！」

一瞬間を置き、断言してやる。誰が好き好んで、握手するか。

「お願いします……——手がもげるような痛みが俺の手に！？ ちがっ！ そっちは曲がら——っ！？」

「……誰が、……カッターナイフで、……握手しろと、……言った……っ！」

恐るべし、Bクラス。意外と怖い人もいるもんだな。

「ワシはBクラスのほうにみてるぞい」

秀吉は立ち上がり、Bクラスに向かっていった。……おっと、俺もやらなければならんことがあったな。

「有働。朝倉と須川を補習室から連れ帰るぞー」
「了解ー」

☆

不肖、柊夜子。現在、隊員A（須川）隊員B（朝倉）隊員C（有働）と共にFクラス前にいます。中には吉井がいる様子。

「あ、アイツ、姫路さんの鞆を漁ってるぞ！」

「黙れ有働、ばれないよう声を潜めろ！」

「ほうほう、これは良いネタだ」

『……っ！？』

有働と須川が口論していると、いきなり隣で声が聞こえた。

「誰だ？」

朝倉が訊ねる。目の前にいるこの誰かはFクラス生徒じゃないはず。見た事が無い人だ。

「何を隠そう。新聞部——」

『吉井君！』

目の前の人が名乗る前に姫路さんの声が聞こえる。俺達見付かってないよな？

さつき居なかったわけだし、今廊下を歩いていたとしか考えられんからな。当然同じ廊下に男子生徒が5人も居たら見付かるだろう。だけど、何にも言われてないことは見付かってないよな……？

『ふえっ!?!』

可愛い悲鳴だ。吉井が出していると考えりゃ吐き気ものなんだけどな。

『な、なに?』

『吉井君……』

姫路さんの泣きそうな声が届く。何コレ、どこのラブストーリー?

『ど、どうかした?』

「くそっ! 吉井が姫路に抱きつかれている!? カッターナイフと異端審問会の用意を!」

須川が声を荒げて言うが、丁度吉井の意味不明な『ほわああっつと!?!』という奇声により相殺された。

セーフなようだな。

『あ、ありがとう、ごさいます……! わ、私、ずっと、どうしていいか、わからなくて……!』

「明久だけ、幸せを掴むなんてユルセナインダヨウ」

ダメだ代表! 自我を失うな! そして、何故Fクラス男子全員集合!?

島田さんは今どこ……何かすいませんでした。まさかツインテールの女の子に絡まれてるなんて……。

『ど、とにかく落ち着いて。泣かれると僕も困るよ』

「「あの野郎。何良いこと言ってんだクソ」」

廊下側の男子の声がユニゾンした。だめだ、吉井。お前はそこから出たら射殺されるぞ。カッターナイフを投擲されて。

『は、はい……』

「よし、姫路が吉井から離れたぞ！ 投擲準備開始！」

「ダメだっ！ 今は姫路がいる！ 殺るのは姫路が去ってからだ！」
吉井。ごめん、俺止められない。この異端審問会組止められないよ。

『いきなりすいません……』

『も、もう一度――』

『はい？』

吉井頑張れ！ 俺は応援しているぞ！

「あの野郎。もう一度抱きついてなんて言う事無いよな？」

「新聞部部長っ！ これはネタに出来ます！」

「勿論するさ。だがしかし、待て。これほどのスキャンダルは実録に……。土屋君、今カメラをもっているかね？」

「……………問題ない。いつでも撮影可能」

『よし、あの野郎の酷評を全校に流せ！』

ダメだ、応援しても流石にこいつらを敵に回せない。

『もう一度壁を壊したい！』

ってバカあつ！ 何でそこでテロ発言！？ 俺の応援は何処に！？

「よし。あの野郎の望み通り、あとで壁を壊さしてやろうぜ！」

『おうっ』

「……コロス、コロ、コロ、アイツダケ幸セ何テ掴マセネエ……」
ダメだ、代表。もう既に自我を失っている。

『あの、更に壊したら留年させられちゃうと思いますよ……』
思いは伝わらない！ 外野なのに歯がゆいぞ、これは！

『……それじゃ、皆のところに行こうか』

『あ、待ってください!』

「姫路が吉井の袖を握ったぞ! 今すぐ投擲の準備を! 絶対に姫路に当てるな! 狙いは袖をピンポイントに定めろ!」

『了解!』

「ま、待つんじゃない! もう少し見てみようぞい!」

秀吉の仲裁で何とかセーフになったこの場。だけど、殺気は場に満ちている。いつ爆発してもおかしくない。

『な、なに?』

『あの……。手紙、ありがとうございました』

『別に、ただ根本君の制服から姫路さんの手紙が出てきたから戻しただけだよ』

「皆見るんだ! 吉井は今照れているぞ!」

「……………撮影完了」

「デレだ! 今デレているぞ!」

「明久……、コロス……コロコロコロ、才前ダケ幸セ何テニアワネ
エンダヨ」

代表っ! もう手遅れかっ!?

『それってウソ、ですよね?』

『いや、そんなことは——』

『やっぱり吉井君は優しいです。振り分け試験で途中退席した時だって「具合が悪くて退席するだけでFクラス行きになるのはおかしい」って、私の為にあんなに先生と言い合いをしてくれていたし……』

『それに、この戦争って……私の為にやってくれてるんですよね?』

『えー!? あ、いや! そんなことは!』

『ふふっ。誤魔化してもダメです。だって私、自己紹介が中断された時に吉井君が坂本君に相談しているの、見ちゃいましたから』
なるほど、道理でいきなり試召戦争の話が代表から出たんだな。
あまり気にしてなかったから関係なかったけど。

「誰か、根本を呼んで来い。どうしてもこのデレデレ空間を破壊するぞ」

「了解っ!」

「アハハ、コロス」

『凄く嬉しかったです。吉井君は優しくて、小学生の時から変わってなくて……』

『そ、その手紙、うまくいくといいね!』

『あ……。はいっ! 頑張りますっ!』

吉井はラブレターが誰宛か知らないのかね。あの口ぶりからすると知らなさそうだが。

『で、いつ告白するの?』

撤回。絶対知らないだろうこいつ。

『え、ええと……。全部が終わったら……。』

Aクラス戦が終わってからか。俺がちょうどこの世界を去るときだな。

『そっか。けど、それなら手紙より直接言った方がいいかもね』

『そ、そうですか? 吉井君はその方が好きですか?』

『うん。少なくとも僕なら顔を合わせて言ってもらう方が嬉しいよ』
『本当ですか? 今言ったこと、忘れないで下さいね?』

『え? あ、うん』

天然だのう、吉井。

「根本隊到着したぞ！ Fクラス内部まで聞こえるように声を出せ！」

誰かの命令が飛ぶ。それにBクラスはグツッと親指を出す。合点承知ってな。

「こ、この服、ヤケにスカートが短いぞ！」

こちら根本の声。何故か女装しているのはご愛嬌。性癖だろう。

「いいからキリキリ歩け」

「さ、坂本め！ よくも俺にこんなことを――」

「無駄口を叩くな！ これから撮影会もあるから時間がないんだぞ！」

「き、聞いてないぞ！」

後日談だが、代表曰く。『生まれ変わったワタシをみて！』の根本女装写真集の撮影らしい。何しかDクラスと同じく、Bクラスとも和平交渉で事を済ませるらしい。俺はAクラスにさえ勝てれば良いからどうでもいいけど。他の皆もあと少してAクラスに勝てそうなので、Bクラスは必要ないらしい。

『なんでしょうか？』

『なんだろうね？』

場の空気が一回転し、普段の空気がFクラス内に漂う。

「よっしゃ！ 花色のFクラスはいつもどおりに戻ったぞ！」

『いえーっ！』

こちらはこちらで場の空気が大盛り上がり。伊達にFクラスではない。

『とにかく、頑張ってね』

『はいっ！ ありがとうございます！』

場の空気が収束したので、そろそろFクラスから出てきそう。Fクラス男子全員が外で聞いてたなんて物凄く悪いのでこれにて解散とする。

「全員避難ーっ！ なお焼肉組は今夜7時に校門前だぞ！ 散開っ！」

『おうーっ！』

というわけで皆避難。代表は自我を失っていたので、そのまま喫茶店にいた気がするAクラスの黒い髪の美少女に預けてあげた。代表の断末魔が聞こえたのはきのせいだろう。

第七問 (1)

問 以下の問いに答えなさい。

『女性は（ ）を迎えることで第二次性徴期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です。

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね。

柊夜子の答え

『エロ』

教師のコメント

『こうこう』という漢字を書きたかったと信じます。

焼肉から二日後。俺達FクラスはAクラスに居た。理由は当然、試召戦争でAクラスと戦うからだ。

待ち望んで、一日千秋の思いで、俺はやっとこの場に立っている。もうすぐだ……、姉貴を殺すにはもう少しで……。

そう思うと思わず顔がにやけてしまう。ああ、愛しい姉貴よ。私は今、貴女を殺しにいきます。

それはそうと、今回の試召戦争は特別らしい。ガチでAクラスと総力戦になると太刀打ちできるのは俺、姫路さんレベルしか居ないから余裕で負ける。だからこそその、特別試合。

お互い五人ずつ選出して、一騎打ち五回で三回勝った方が勝ちっという特別ルールだ。そして、勝負科目はFクラスが三個、Aクラスが二個選ぶのだ。

あとは……、負けたほうは何でも一つ言うことを聞くっていう話だ。ちなみに俺は宣戦布告の時、須川と全力で古今東西していた為いなかったの、詳しくは知らない。

そんなこんなでようやく本日をもって俺は、この世界を出れるってわけだ。ふふっ、姉貴待っとけよ。絶対殺してやるから。

「では、両名共準備は良いですか？」

今回の立会人を務めるのはAクラス担任かつ学年主任の高橋先生。確かDクラス戦でも見た気がする。

「ああ」

「……問題ない」

両陣の代表が同意する。そういえば向こうさんの代表は、こないだ我らが代表と一緒に喫茶店に来ていた女の子では無いか。さてはて、代表とどういう関係だろう。朝になんか言ってた気がするけど、昨日は興奮してあんまり寝れなかったからな、寝ちまって聞いてなかった。

「それでは一人目の方、どうぞ」

「アタシから行くよっ」

Aクラスの一人目は秀吉の姉、優子様。頭良かったんだあの人。

そして、俺らからは、

「ワシがやろう」

秀吉だ。今回秀吉が選ばれた理由は、身内なので優子様の苦手科目や、息の乱し方を一番理解してるから、だそうだ。

あー、俺も出たいが、寝てたからなあ。俺は選ばれて無いだろう。

「ところでさ、秀吉」

「なんじゃ？ 姉上」

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

優子様から邪険なオーラが出る。どこの世界でも姉強し。

「じゃーいいや。その代わり、ちょっとこっちに来てくれる？」

「うん？ ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

何かわからないけど、秀吉。ご愁傷様。

『姉上、勝負は――どうしてワシの腕を掴む？』

『アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？ どうしてアタシが

Cクラスの人達を豚呼ばわりしていることになっているのかなあ？』

『はっはっは。それはじゃな、姉上の本性ワシなりに推測して――

あ、姉上っ！ ちがっ……！ その関節はそっちには曲がらなっ……！』

……！』

ガラガラガラ

扉を開けて優子様が帰ってきた。当然秀吉は居ない。

「秀吉は急用ができたから帰るってさっ。代わりの人を出してくれる？」

お、これはチャンス。俺が出れるじゃないか。

「い、いや——」

代表が不戦敗を認める前に俺が口を挟む。

「よし、代わりに俺が出よう！」

「貴方、夜子君……っ！」

何故驚くんさい？ 優子様。俺は、Fクラスだぜい？ バナナ料理が上手いからってDクラスじゃないんだぜ？

「一つだけ頼みがある。この試合の後に続く、吉井とチーム戦にしてくれ」

俺が頼む。性職者の実力は知らないが、選出者の中で一番成績が低そうなのは吉井だろう。それならついでに俺が勝たせて、勝率を上げよう。

「そ、それは……」

向こうは向こうで渋る。ありゃ、俺が吸血鬼ってばれてる？ ふむ。

「雑魚の吉井を先に片付けてから、俺を二人で潰したほうが良いんじゃないのか？」

にやりと笑いながら言ってる。案の定吉井が「雑魚って!?!」とか言ってきたが無視無視。

「……。いいわ、受けましょう」

よし、許可が出た。

「けど、夜子君が嫌いな物理でやるわよ？」

「ああ、それぐらいは了解さ」

……計画通り。新聞部員がAクラスにいて、敢えて得意科目の物理を苦手科目って言っというて良かった。俺は策士なんだ。

「先生、Aクラスは木下優子と佐藤美穂が行きます」

「んじゃ、こっちは柊夜子と吉井明久で」

さてここからが本番。

『吉井、本気で行くぞ』

『うん、当然』

Fクラス直伝、アイコンタクト発動っ！ これは見詰め合ってると思われる仕草だが、ちゃんと会話ができる無駄に高性能のスキルである。

「明久、お前ならいける」

後ろで代表が吉井を応援をする。そして目の前の優子様は、

「夜子君、残念だったわね。こちらは物理が得意なのよ」と言ってくる。

「「ふう……。やれやれ、僕（俺）に本気を出させてこと？」」

俺と吉井は、一寸の違いも無く一字一句同じ言葉を口にする。いや、僕とか俺とかの一人称は違うが。

「ああ。もう隠さなくてもいいだろう。この場にいる全員に、お前の本気を見せてやれ」

『おい、吉井って実は凄いヤツなのか？』

『いや、そんな話は聞いたことないが』

『いつものジョークだろ?』

『柊、お前……っ! 冗談はよせ!』

『ダメだ。いくら柊でも……っ!』

本来味方の筈のFクラスの皆の声。

まあ、仕方が無い。普段、たまに俺が書くバカな回答しかお前らに見せてないからな。けど、

「吉井君、でしたか? あなた、まさか……」

「夜子君、……貴方まさか……」

佐藤さんが吉井のアレに気づき、優子様が俺のアレに気づく。

良い観察眼してんなあ、二人とも。流石Aクラス。

「「あれ、気付いた? ご名答。今までの僕は（俺は）全然本気なんて出しちゃあいない」」

戦闘の為に俺と吉井は同時刻、袖をまくり、手首を振る。軽い準備体操だ。

「それじゃ、あなたは……!」

「それじゃ、夜子君は……っ!」

「「そうさ、君の（優子様の）想像通りだよ。今まで隠してきたけれど、実は僕（俺）——」」

大きく息を吸い、この場にいる全員に聞こえるように告げる。

『――左利きなんだ』

『Aクラス	木下優子	佐藤美穂	VS	Fクラス	柊
夜子	吉井明久				
物理		410点	389点	VS	
70点		62点』			

おかしい。全力を出したのに。

第七問 (1) (後書き)

Aクラスに勝つ↓終了。

Aクラスに負ける↓二巻突入。

誰か私に良い案を……っ！

第七問 (2)

「あれは柊君のせいだよ！」

「いや、違うね。あれは絶対吉井のせいだって」

「あそこで後ろから——」

うん、絶対負けたの吉井のせいだわ。俺だけなら二人一気に殺れたね、うん。途中で吉井さえ邪魔しなかったのう。

「このバカ！ テストの点数に利き腕は関係ないでしょうが！」

「み、美波！ フィードバックで痛んでるのに、更に殴るのは勘弁して！ そして柊君は何で須川君達と何事も無いように古今東西してるの！？」

無視だ無視。相手にするな俺。負けたのは全部吉井のせいなんだ。俺しーらね。

「よし。勝負はこれからだ」

「ちよっと待った雄二！ アンタ僕を全然信頼してなかったでしよーう！」

「信頼？ 何ソレ？ 食えんの？」

流石代表。吉井の実力を知っているだけはあるな。

「では、三人目の方どうぞ」

「……………（スック）」

こちらは性職者か。お手並み拝見っと。

「じゃ、ボクが行こうかな」

対する相手は、色の薄い髪をショートカットにしている、ボーイッシュな女の子。一見すると少年みたいだ。

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。よろしくね」

「教科は何にしますか？」

学年主任が性職者に尋ねる。

「……………保健体育」

保健体育か。性職者の名前だけに得意なのかね。

「土屋君だっけ？ 随分と保健体育が得意みたいだね？」

工藤さんが性職者に話しかける。その口ぶりからすると、やはり性職者は保健体育が得意なのか。だがしかし、その態度は結構な余裕だな。

うん、吉井のせいで俺まで巻き込まれて負けたからね。畜生。

これから全勝しなければ、確実に俺は姉を殺せない！

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？ ……キミとは違って実技で、ね♪」

やべえ、少しでもときめいた男子はここにいる女子に興味がある男子全員だろうっ！

「そっちのキミ、吉井君だっけ？ 勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？ 勿論実技で」

吉井が話しかけられる。よし、総員カッターナイフの投擲準備オ―ケーだな？

「フッ。望むところ――」

「総員、投擲開始！」

『おうっ！』

スッ（一秒の狂いも無く同時に発射されたカッターナイフを余す

ことなく全部避ける音)

バ、バカな！？ あの Cutter ナイフを全て避けただど！？

「甘い！ 僕はその程度――」

「アキには永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！ 永遠に必要ありません！」

「……………」

「島田に姫路。明久が死ぬほど哀しそうな顔をしているんだが」

島田さんと姫路さんの言葉で、皆、興が削がれたのか、第二撃に用いるはずだった Cutter ナイフを懷に仕舞う。

「そろそろ召喚を開始して下さい」

「はい。試獣召喚っ」と

「……………試獣召喚」

言葉と共に顕現する、二人の召喚獣。デフォルメされた二人が装備するのは、性職者が小太刀の二刀流に、対する工藤さんは――

「なんだあの強大な斧は！？」

驚いた。あれじゃあ、流石に性職者でも。しかも相手の召喚獣には、特定の点数を満たすことによって召喚獣に特別な能力が付加する腕輪もあるじゃないか。

「実践派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

刹那、強大な斧に雷光を纏わせ、性職者の召喚獣に詰め寄る。

「それじゃ、バイバイ。ムッツリーニくん」

そして、豪快に斧を振う。いかに性職者が凄いといってもこれは避けられるレベルじゃない。

「ムッツリーニっ！」

吉井が声を出す。

斧が召喚獣を両断する――

「……………加速」

またしても刹那、性職者の召喚獣の腕輪が輝き彼の召喚獣が尋常じゃないスピードで、工藤さんの召喚獣を幾数もの数で切り刻み、通り抜ける。

それはさながら時代劇でよくある、あまりにも早すぎて、倒れるまで時間がかかるみたいない感じだ。

多分あれは俺しか見切れないだろう。

「……………え？」

吉井には見えなかったらしい。疑問の声をあげた。

そして工藤さんとはいうと、戸惑いの顔。

周囲の人間は啞然。

「……………加速、終了」

ボソリと、性職者が呟く。

そして、一拍置き、工藤さんの召喚獣が全身から血を噴出しながら倒れた。

『Aクラス 工藤愛子 VS Fクラス 土屋康太』

保健体育 446点 VS 572点 』

つ、強い！ 俺でも得意科目の物理で最高が360点だぞ！？
奴は化け物かっ！？

「そ、そんな……！ この、ボクが……！」
工藤さんが床に膝をつく。相当ショックみたいだな。

第七問 (3)

「これで二対一ですね。次の方は？」

学年主任が淡々と作業を進める。うん、Fクラスがうちのクラスに勝てるわけがない、って高を括っているな。別にどうか問題じゃないけどね。

「あ、は、はいっ。私ですっ」

Fクラス4番手は姫路さん。まあ、妥当な線だろう。何せ、成績が学年で二位だもの。

「それなら僕が相手をしよう」

対するAクラスは……名前は分からないが、さきほどから吉井に熱い視線を投げかけている人。本意はわからないが、まあ、うん、別に俺は同性愛を否定しないよとだけ言っておこう。

「ここが一番の心配どころだ」

代表が言うが、何が心配かわかんない。

相手さんと姫路さんの成績が互角かどうかかな。うん、それが一番妥当だろう。

「科目はどうしますか？」

学年主任が二人に声をかける。

科目選択権は俺と吉井チームでごっちゃになった為、どっちにあるか判断できない。

「総合科目でお願いします」

すると、相手さんが答えた。

「ちょっと待った！ 何を勝手に――」

吉井が止めにはいる。それに対して、姫路さんかというと。

「構いません」

問題は無いようだ。

「姫路さん？」

吉井は姫路さんが言うにもかかわらず、心配顔だ。本人が言うなら良いけど、まあ、負けたら俺この世界残留決定だからな。ちゃんと勝ってほしいね。

「それでは……」

学年主任が前と同じように操作を行う。

そしてそれぞれの召喚獣が呼び出され――一瞬で片がついた。

圧倒的っていう言葉がこの状況を的確に表している。

姫路さんかっけー。

『Aクラス	久保利光	VS	Aクラス	姫路瑞希
総合科目	3997点	VS		4409点

点数差400点以上。圧巻としか言いようが無い。

『マ、マジか！？』

『いつの間にこんな実力を！？』

『この点数、霧島翔子に匹敵するぞ……！』

所々で驚きの声があがる。あ、あっちの代表、霧島翔子さんって言うんだ。今知った。

「ぐっ……！ 姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ……？」

久保君が悔しそうに姫路さんに尋ねる。

いやいや、テストで強さとか関係あるのか？ うん、俺が元いた世界じゃテストの点を強さとかで表した記憶が無いな。

「……私、このクラスの皆が好きなんです。人の為に一生懸命な皆のいる、Fクラスが」

「Fクラスが好き？」

「はい。だから、頑張れるんです」

姫路さんの優しい台詞。

うん、ごめん。俺、自分の為にしか頑張っていない。むしろ姉貴の為？ 言葉の解釈の仕方によってはどっちでも取れるけど。

というか、Fクラスって悪い意味での『人の為に一生懸命になれる』では……？

人の不幸の為に一生懸命になれる……だよね……。空気ぶち壊したくないから、喉元でその台詞を止めるが。

「これで二対二です」

学年主任の表情に一瞬変化が見られた。

Fクラスが対抗しているのに驚いているのだろうか。

「最後の一人、どうぞ」

「……はい」

ラストの勝負は飾るに惜しくない、クラス代表の一騎打ちだ。

こちらは当然、代表の坂本雄二。

対する相手は、喫茶店などでよく代表と訪れる、黒い髪、落ち着いた表情が印象な、人形みたいに美しい子。名前は多分、霧島翔子さんだろう。

「俺の出番だな」

我らが代表の自信満々な台詞。うん、野性味溢れるそのスペックがより輝く、格好良い台詞だ。

「教科はどうしますか？」

Aクラスはだいぶ静かだ。学年代表でもある、霧島さんの負ける可能性なんて念頭にも無いんだろうね。

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

色々あやふやになった為、教科選択はどうなってるか分からないが、代表が選択する。うん、妙に大きい声をあげているのは何故だろう。

ざわ……！

そこで、Aクラスにざわめきが生まれる。

『上限ありだって？』

『しかも小学生レベル。満点確実じゃないか』

『注意力と集中力の勝負になるぞ……』

Aクラスからそんな声があがる。それに対してFクラスは疑問の声すらあげない。俺が寝ている最中に説明でもあったのだろうか。

「わかりました。そうなる問題を用意しなくてはいいけませんね。少しこのまま待っていてください」

先ほどまで開いていたノートパソコンを閉じ、学年主任が部屋から退室する。

しばし訪れる、沈黙の間。

しばらくして、沈黙を破りさった吉井が、代表に近づき握手をする。

「雄二、あとは任せたよ」

「ああ。任された」

代表もぐつと握り返す。

そして吉井が代表から離れる。次に性職者が歩み寄る。

「……………（ビッ）」

ピースサインだ。小柄な体だけに、そのモーションが似合う。

「お前の力には随分助けられた。感謝している」

「……………（フッ）」

性職者は口の端を軽く上げ、代表から離れる。

そして最後は姫路さんが近づく。

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございました」

「ああ。明久のことか。気にするな。あとは頑張れよ」

「はいっ」

姫路さんがにこやかな笑顔とともに元気な返事をする。

代表はその仕草を見て、楽しそうな優しい笑顔を形作る。

さて、これで俺のこの世界に残留か、脱出か。それがこの試合にかかる。是非とも勝ってくれ。

頑張れよ、代表。と、応援するのはガラでは無いので心の中にだけ仕舞っておく。

第七問 (4)

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かって下さい」

テスト製作を終了して戻ってきた学年主任がクラス代表二人に声をかける。

「……はい」

短い返事をし、霧島さんは教室を出て行く。

「じゃ、行ってくるか」

「はい。行ってるっしょい。坂本君」

「ああ」

代表は姫路さんに送り出されて、最終決戦へと向かう。これがラストの試合。何がどう転がろうと残留か帰還の二択だ。出来ればじゃなく、絶対帰りたい。いやちょっと名残惜しいけど。

「皆さんはここでモニターを見ていて下さい」

学年主任が、壁のディスプレイに視聴覚室の様子を映し出す。

そして、霧島さんが先に席に着き、代表がやってきた。

『では、問題を配ります。制限時間は五十分。満点は100点です』
代表の選択通りに製作された日本史のテスト。

今回視聴覚室で監督を務めるのは飯田先生という方。その先生が裏返しの問題用紙を二人の机に置く。

『不正行為等は即失格になります。いいですね?』

『……はい』

『わかつているさ』

『では、始めてください』

二人の手によって問題用紙が表にされる。

代表は終始余裕をとれる表情だ。何か、作戦でもあるのだろうか。周囲のFクラスの人達は必死で問題を探しているし、んー、朝の時点で何か話してたのかな？

《次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。》

（ ）年 平城京に遷都

（ ）年 平安京に遷都

（ ）年 鎌倉幕府成立

（ ）年 大化の改新

流石小学生レベル。余裕だ。

丁度、大化の改新が出たあたりでFクラスからざわめきが起こり、
そして――

「うん！ これで僕らの卓袱台が」

『システムデスクに！』

「最下層に位置した僕らの、歴史的な勝利だ！」

『うおおおっ！』

――そして教室を揺るがすような歓喜の声でAクラスの教室は満

ちた。

《日本史勝負 限定テスト 100点満点》

《Aクラス 霧島翔子 97点》

VS

《Fクラス 坂本雄二 53点》

どうやら俺の帰還は当分無いようだ。

最終問題

問 次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。

『（ ）年 大化の改新』

霧島翔子の答え

『625年』

教師のコメント

惜しいです。この間違いさえ無ければ満点でしたね。

坂本雄二の答え

『ふ、翔子に間違いを覚えさせた問題が出てきたようだな645年』

教師のコメント

貴方が犯人でしたか。

「三対二でAクラスの勝利です」

場所は視聴覚室。代表の敗因については是が非でも処罰を加えたい俺達が視聴覚室になだれこんだのを見て締め台詞を発する学年主任。

うん、わかっている。俺らの負けだ。代表が馬鹿だったせいだな。

「……雄二、私の勝ち」

床に膝をつく哀れな我らが代表、坂本雄二に霧島さんが歩み寄る。

「……殺せ」

少し間が空いたあと、代表が言った。

「良い覚悟だ、殺してやる！ 齒を食い縛れ！」

「待て吉井。これでやれ」

俺が刀を渡す。銃刀法違反？ 異世界ですから！

「吉井君、落ち着いてください！」

吉井が大きく後ろへ振りかぶったところで、姫路さんが抱きつきながら吉井を止める。

それにしても、何故先生は刀を止めない？ 自分で出しといたくせにだけど。模造品と思われてんのかね。

「だいたい、53点ってなんだよ！ 0点なら名前の書き忘れとかも考えられるのに、この点数だと――」

「いかにも俺の全力だ」

何故自信満々に言うんだい。

「この阿呆がぁーっ！」

「アキ、落ち着きなさい！ アンタだったら30点も取れないでしようが！」

「それについては否定はしない！」

どんだけ頭悪いんだよ、吉井。

「それなら、坂本君を責めちゃダメですっ！」

「くっ！ なぜ止めるんだ姫路さんに美波！ この馬鹿には喉笛を引き裂くという体罰が必要なのに！」

Fクラス男子は皆概ね同意なのか、うんうんと、頷いている。俺も同意だ。

「それって体罰じゃなくて処刑です！」

姫路さんの必死な制止の応酬で吉井はなくなり我慢した。

代わりに俺が言ってやろうか、いやだめだ。秀吉が姫路さん役になりそうで怖い。

「……でも、危なかった。雄二が所詮小学校の問題だと油断していなければ負けてた」

「言い訳はしねえ」

うん、台詞は格好良いが、土に還したくなるのは何でだろう？

「……ところで、約束」

そういや、Aクラスとの試召戦争で何らかの特例ルールのうちの一つに？負けたほうは何でも一つ言うことを聞く？ってルールあったな。

周囲の男子が一斉に視線を、姫路さんと霧島さんの顔を往復する。なんでだろうね。霧島さんは姫路さんより代表の方が好きだろうに。

「わかっている何でも言え」

潔い代表の返事。

「……それじゃ——」

霧島さんが姫路さんに一度視線を送り、次に俺へ向ける。

うん、何で？ 何で目で『この女の子は誰？』って俺に向けてくるの？ 喫茶店で一度会っただけなのに、何でそこまで俺信用得ているの？

『その子は吉井のことがめっちゃ好きな子』とアイコンタクトで返事をする。すると、霧島さんが一瞬目を細め、『そう、ありがと』みたいなことを返して来た。

そして息を小さく吸い、視線を代表へ向けて、

「……雄二、私と付き合って」

——告白した。

ありゃ、まだ付き合ってなかったんだ。仲良さそうに喫茶店に来ていたからてっきり俺は、カップルと思っていた。

Fクラス男子が全員目を丸くする。何でそんなに驚きなんだろうね。

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか」

「……私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」

やばい、ちょっと代表に殺意が沸いてきた。自分がやってあげようと思うとき以外に、目の前でラブストーリーが展開されるとちょっと殺意が沸くよね。

「その話は何度も断っただろ？ 他の男と付き合う気はないのか？」

「……私には雄二しかない。他のひとなんて、興味ない」

うん、代表羨ましい。そんな可愛い子に告白されてね。俺も告白されたいね。女子から。

「拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデートに行く」

「ぐあっ！ 放せ！ やっぱこの約束は無かったことに——」

ぐいっ つかつかつか

霧島さんは代表の首根っこを掴み、教室を去った。

「……………」

「……………」

「……………」

Fクラスの教室にしばしの沈黙が訪れた。うん、皆驚きすぎて、声が出ないみたい。

さてっと、俺はまた別口の帰還する方法を探るかな。

その時不意に、ぐいっつといきなり首根っこを掴んでひっぱられた。

「ぐあっ！？ 誰だ！？」

「夜子、助けにきたよー」

声からして女の子のようだが、うん、待って。今首根っこを掴まれてそのせいか、首が酷いことになってんだけど？

周囲の人は霧島さんの告白騒動から目を覚まし、俺と？彼女？に視線を向ける。

「誰じゃ、お主？」

最初に秀吉が、不審な視線を彼女に投げかけながら質問する。

「うん？ 私？ 夜子の嫁だけど？」

やはりか。声を一瞬聞いてまさかと思ったが、よりによってこいつとは。別に俺はお前の旦那じゃねえ！

「よ、嫁じゃと！？」

うん、秀吉。その驚き方は明らかにおかしいよね？ どっちなかな。片方は考えたくない選択肢なんだけど？ うん、別にBLなんて興

味ないからな？

「柊葵。^{あおい} うん、別に妹じゃないので悪しからず。そして以後よろしく。近いうち会うかもね」

おいこら待て、いつからお前は柊さん宅の娘さんになった。
そんな風に考えていても声に出せない俺は小心者じゃない。

「帰るよ、夜子。んじゃねー」

Fクラス男子達に手を振り、そして、指を鳴らす。それによって起こる現象は――

「おまつ！ 人前で魔術――――――っ！？」

――やはり魔術だった。俺が一番恐れる姉貴の最大の汚点と特技である、そう、魔術だ。しかも、移動系の魔術。一瞬時空間を渡った為吐き気がする。まあ、何度も味わってる為結構耐性ついてるけどね。

さて、葵がこちらに来たということだが多分姉貴の指示だろう。
とりあえず、今言えることは――

明日からは忙しくなりそうだ、ということだった。

最終問題（後書き）

やっと、一巻分終了です。そして、私のこんな駄文を見てくれる心優しき読者にいつも感謝です。

さて、今回の話で出てきた夜子の嫁と魔術ですが。うん、両方どっちも設定が無かったりします。魔術？　いいえ魔法です。とも言えそうなほど、とても便利な魔術ですね。あれ、呪術も同じ類？
(r y

そんなわけで、これからこんな駄文ですがよろしくお願いします。

第二章 俺と葵と秀吉と不幸な召喚大会

リビングの机に腰掛ける俺と葵。おっと、こう表現すると机の上に座っているみたい（みたいではなく、そう）だが、それは断じて違う。ちゃんと俺たちは椅子に座っている。

勿論対面式で、家族会議ではない。所謂尋問みたいなもんだ。結構軽い尋問だけど。

「さて、こちらにきた理由を教えてくださいらおうか」

「うん？ 私がこっちにきた理由？ そんなの旦那の為じゃない」
あっけらかんに答えられるが、断じていえよう。俺はこいつの旦那じゃない。

「ほう。んで、今回の呪術？ はいいつも通りの姉の気まぐれで？」

「いんや、義姉さんは違うって言ってたよ。今回は？実験？の規模が違うでしょ？ それより、義姉さんが言ってた紙はどこ？」

「実験の規模ねえ……。普段とそんなに変わらんが。紙はこっち来て二日目で無くした」

うん、公園で人には言えないことに遭った時に紛失してしまった。

「は？ え、無くしたってどういうこと？」

「いやだから――」

一応、変な部分を端折って説明。

「夜子。アンタ、義姉さんに殺されるわよ？」

「ハッ、バカなこと言いなさんな。魔術とか呪術とか召喚術の類しか使えないお前ら術師に負けるわけがないだろう」

「うん、まあ良いんだけどね。とりあえず、アレは学園長に発見さ

れることが一番恐れないと」

妙に思案顔して、俺に言う葵。うん、黒い髪のショートカットは今日も似合っている。可愛いんだけど性格が残念だな。

「ん？ 学園長？」

「そ、学園長」

何で学園長が関係するんだと思ったが心のうちに仕舞う。分からないことは考えても仕方が無いからね。まあ訊ねる雰囲気じゃないし、また今度でいいや。

「ささ、今日は寝ないと。私は当分、術式組み立てに入るからね。アンタは魔術使えないというか使わないんでしょう？ んじゃ私がちゃんと術式組み立てないと」

「ほう、一人で召喚術式組み立てれるようになったのか？」

「うん。けど夜子に言われると腹が立つ。出来るくせに使わないのが」

「なんでやねん、俺は魔術とかあんな法則もクソも無いものなんて使えるか」

「清涼祭までにはそっちに行くから。学園長にはもう話をつけてる。んじゃ私寝るよー」

一方的に会話が切られ、葵は空き部屋に入っていく。その背中では幾分か嬉しさの感情が出ている感じがした。

――葵も俺と一緒にこの世界に閉じ込められたのに。

――葵が姉にこっちの世界に落とされたならもう戻れない。

――わけわかんねえ。

第二章 俺と葵と秀吉と不幸な召喚大会（後書き）

やっと二巻目突入する寸前。あれ、今日本屋で七巻が（r y

第一問

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『あなたが今欲しいものはなんですか？』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になるような、そういった出し物も良いかもしれませんね。写真館とかも候補になり得ると覚えておきます。

柊夜子の答え

『愛』

教師のコメント

愛ですか。

須川亮の答え

『を』

教師のコメント

を、ですか……？

朝倉正弘の答え

『私』

教師のコメント
私……？

有働住吉の答え
『に』

教師のコメント
『愛』『を』『私』『に』ですか……？

横溝浩二の答え
『勿論柊の』

教師のコメント
この言葉で謎が深まるばかりです。

木下秀吉の答え
『なのじゃが、ほしいのじゃ！』

教師のコメント
『愛』『を』『私』『に』『勿論柊の』『なのじゃが、ほしいのじゃ！』

随分と手の込んだアンケートですね。一瞬言葉を失いました。

柊葵の答え
『と思ったかバカめ』

教師のコメント
先ほどの軽率な発言は失礼しました。まさか、Aクラスの中から続きが見付かるなんて。

桜色の花びらが坂道から徐々に姿を消し、代わりに新緑が萌えだすこの季節。

この学園こと文月学園では、学園祭もとい『清涼祭』が準備された。

そして俺達Fクラスはと言うと――

「さて、お前と葵さんの馴れ初めから尋問しようか」

黒覆面と黒マントを着用した彼が喋る。なぜ彼と呼んでいるか。それは多分須川だろうけど、覆面をしている為誰かわからんからである。

そんな感じに何故俺が異端審問会による尋問を受けているか。それは今週、転入してきた葵が原因だった。

葵というのは、自称柊さん宅の俺の嫁。試召戦争でAクラスに負けた日に彼女が突如現れ、カミングアウトしたのが今回の伏線にあたるだろう。

ちなみに、試召戦争は泥沼化を防ぐ為に敗者は三ヶ月間、試召戦争の申し込みが出来ない。そして、Fクラスは負けた為、それと、ルールに順ずる形で設備が1ランク下げられ、卓袱台がミカン箱になった。筆記の際、貫通するのではないかと心配だ。

「ああ、あれはだな。今から数年前――」

「いいから要点だけを話すのじゃ」

背後からそう急かされる。ふむ、この翁言葉は秀吉だな。普段はこういうのに参加しない良い子だったのに、何でだろう。

うーん、どう話そうか。

そう考えていると、Fクラスの扉が開いた。この展開は物理の法則より俺を裏切らない。

――扉の先には葵がいた。貧相な胸に、ショートカットな子が特徴な活発そうな雰囲気や場に与える女の子だ。

「やつほー、夜子。遊びに来たーうわ、汚っ！」

じゃあ、くんやとツツコミたいが、ツツコミを入れると俺の貞操の危機に関わりそうなので止めとく。

シュツ（異端審問会、全員がナイフを取り出す音）

フツ、葵よ。俺死ぬかもしれん。だから言っておく。何で来たんだと。

普段はカッターナイフなはずなのにナイフとは、今回はレベルが高い。それほどまで俺が憎いのか。そして秀吉。君も何故スタンバイ？ というから皆ナイフをどこから取り出した？

「遺言は？」

須川がどこか憂いを帯びた声を出す。どうやら俺に容赦は無いようだ。

「来世は――ちゃんと恋愛が出来ますように……っ！」

スツ（俺がナイフが飛んでくる気配を察知し、数歩分くらいの幅を横に即行で移動する音）

カカカカカッ（ナイフが地面に突き刺さる音）

ダッ（俺、教室から逃亡）

俺が言葉を紡いだ瞬間全てのナイフがさきほどもで俺がいたゴザに突き刺さる。俺はその気配を察知し、避けた。流石俺と自己陶醉に浸る暇も無く、須川率いる異端審問会が追撃してくる為、教室をあとにする。

☆

「あははっ、Fクラスの子面白いわね。うん、私もFクラスに入れば良かった」

隣で呟くのは葵さん。異端審問会からの逃亡する俺についてきた。

「え、お前Fクラス違うかったの？ Eクラス？」

「失敬な。私はAクラスだよ」

「バ、バカな！？ こんなアホな子がAクラスだと……っ！？ ……まさか——」

「魔術を使った……？」

「ち、違うわよ！ アンタどれだけバカにしてんの！？」

「いや、バカにするとかしないとかじゃなく、その容姿でねえ……？」

うん、やっぱりスポーツ万能勉強からっきしっていうイメージがあるね。

と、不意に思ったが、ここどこなんだろう？ 何か最近来たことがあるような。

「はいはい、そこでイチャイチャするんじゃない。ここは学園長室さね、イチャイチャする場所ではないよ」

「白髪が特徴な置物を見て思い出した！ ここは学園長室だ！」
うん、確かこの置物は学園長だった気がする。

「普段なら怒るところだけど——アンタ達の狙いはこれかい？」

いきなり神妙な面持ちで語りかけられる。やだなあ、俺こういうシリアスな雰囲気結構嫌い。

おもむろにポケットから取り出したそれは、紛う事なき例の紅い文字が綴られていた紙だ。現在は何も書かれていないようだが、まあ良い。今は何でこのババアが持っているかだ。

「何でそれを持っているんです？」

葵が敬語で尋ねる。うん、敬語使えたんだね。俺ビックリだよ。

「それはそっちのバカに聞きな。私は落ちていたものを拾っただけさね」

そっちのバカというのは俺のことだろう。俺に視線を一回送ったし。

「夜の公園で変質者に追いかけられたという話は聞きました。それは貴女の差し金ですか？」

「失礼さね、私はそんなの姑息なことほしなさいさ」
結構してると思うのは俺だけなのか。

「これはアンタ達にも大事なもんなんだろう？　ここで交渉をしようじゃないか」

「そんなものが取引の材料になると思っているんですか？　私達の生み出した術式はそんなものと釣り合うには天と地の差があります」
術式というのは俗に言う魔術だ。そんないつにもなく強気な葵の言葉に一瞬たじろぐ。

けれどそれは束の間、すぐ落ち着きの体裁を装う。

「別に悪い取引じゃないさ、ただ——」

不意に葵が、パチンと指から音を出した。それは魔術を使うときの合図。身構えようとした時その現象は起きた。

学園長の持っていた紙が燃えた。萌えではなく、燃えた。

学園長が咄嗟の判断で紙を放した。そして空に舞う紙、それは地面に落ちる前に灰になった。

「今のが魔術かい？ 相変わらずおかしな力さね」

昔に見たことがあるというニュアンスを含めた言葉を学園長は呟いた。

「まあいい、取引の交換材料は無くなったわけだが、一応アンタらに伝えよう」

そこで一呼吸の間をおく。そして、

「アンタ達、清涼祭の出し物である召喚大会に出ないかい？」

と言った。

召喚大会ねえ……、字面的に召喚獣を用いた大会かのう。

さてどうするか。と思い、隣に視線をやった。視線の先は勿論葵。

「良いですね。夜子、一緒に出て夫婦宣言するわよ」

何で目が据わってるんだ。

「え、やだよ。俺はお前と出るなら秀吉が良い」

「そんなにもあの子のことが……？」

何かいきなり表情が喜怒哀楽の喜から哀に変わる。

「や、誤解すんなよ？ アイツ男、俺男」

「恋愛に性別は無い」

「BL！ お前同性愛肯定するならレズも良いんだよね？」

「え、それはちょっとキモい」
少し傷つく。

「キモいつてあのなあ？ お前が言ってる旦那にそんな——」

「認めてくれたんだ」

「撤回。すまなかった」

うん、いつまで経ってもこいつに勝てる気がしないね。

「はいはい、話は以上だ。わかったなら部屋から出て行くさね。こ
っちは今開発に忙しいんでね」

という学園長の命令で部屋を退室。

『ウェルカム』

扉を開けた先にFクラス男子一同が集まっていたのを理不尽に思
えた。

第二問 (1)

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。
『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか?』

姫路瑞希の答え

『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、良い考えです。

柊夜子の答え

『ノーコメント』

教師のコメント

だったら何でアンケートに答えたんですか。

俺は試験召喚大会に出ることにした。何故かと言うと、葵と取引をしたんだ。勿論賭ける内容は優勝したら敗者に一つだけ言うことを聞かせるっていうことで、両方優勝できなかったらドローだけだね。

その際の会話を簡潔表現。場所は俺の家で清涼祭前日。

「ねえ、夜子。私と出るのが嫌なの?」

「当たり前だろう?」

「そう、んじゃ勝負しようか？」

「勝負だと？ 俺に勝てるんでも？」

「うん、旦那の為ならね？」

「だから俺は旦那じゃねえ！」

「ということで取引成立。楽しみにしてるよ、よ・る・こ」

そんな感じだ。

というわけで、

「えー。それでは、試験召喚大会一回戦を始めます」

召喚大会のステージは、校庭に作られた特設ステージ。そこで召喚大会が催される。

「三回戦までは一般公開ありませんので、リラックスして全力を出してください」

今回立会人を務めるのは、一回戦の教科である数学の木内先生。

さてここで問題。俺の相棒は誰でしょう？

『？――秀吉』

『？――吉井』

『？――代表』

勿論誰でもない。俺の相棒は須川だ。

「わざわざ学園祭の出し物である中華料理を放って来たんだ、それなりに賞品はあるんだろうな？」

その言葉には苛立ちなど無く、頼まれたことに対する嬉しさやこの行事に楽しみを抱いてる感じだった。

「ああ、凄いものがな」

勿論嘘である。だけど須川はバカな子なのですんなり信じて「了解だ」とか一人何度も頷いていた。
別に罪悪感など感じちゃいない。

そして対する相手は、何の因果か朝倉と有働だった。何だあいつら。

「へへっ、一人だけ抜け駆けなんてずりいぜ須川ようー」

これが朝倉。もう何かに、とり憑かれている。

「惨いー、嫁といちゃいちゃしてるんだってえなあー」

そしてこれが有働。同じく何かにとり憑かれている。

「では、召喚して下さい」

その木内先生の声を皮切りに召喚大会一回戦が開始される。

『試獣^{サモン}召喚！』

4人の声と同時に足元で幾何学的な魔法陣が浮かぶ。

こちらは恒例のデフォルメされた俺の召喚獣、装備は当然の如く、浴衣と蝙蝠の羽。これだけ見ると、レミの羽——失礼。

そして相棒の召喚獣は、道着に棍という普通の装備だった。

対する朝倉と有働の描写設定？ 無い為か俺には見えなかった。

決して見てはいけないものを見たのではない。

「ふふ、俺の召喚獣の装備を見て驚いたか」

朝倉が俺に喋りかけてきた。

「当たり前だろう！ そんなお前その装備は——」

「隙ありっ！」

喋っている最中に有働の召喚獣が突っこんできたので、俺は一下がり有働の得物をすんでで避ける。

「須川っ！」

「おうっ！」

俺の言いたい事がわかったのか、気前の良い返事してくれた。
よし――

『ここはお前に任せる！ 俺はお前を盾にして攻めるからよろしく！』

声が重なったのは気のせいと信じたい。

「甘いっ！」

俺は召喚獣に指示を出し、須川の召喚獣の足をひっかけた。

「きたねえ！ だが甘いぞ柊！ 死ぬならお前も道連れだ！」

こけた須川の召喚獣が俺の召喚獣の足を掴む。

「黙れ！ 俺は勝たないとな！ 勝たないとな！」

――葵の着せ替え人形にされてしまうじゃねえかつ！

「……あー、あのだがな？ 須川と柊？ 俺らと戦っているんだよな？」

俺と須川の不毛な争いを見て遂にツツコミを入れてしまったのか、有働が俺たちに語りかけてきた。

『勿論だ』

声が重なる。

流石相棒だ。息が合っている。

「じゃあ、本気で行くぜ？」

その朝倉の声と共に朝倉の召喚獣の腕輪で光った。つまりそれが指示することは――能力。

「は？」

須川はあまりのことに素っ頓狂な声をあげた。そりゃそうだろう、相手はFクラスだぜ。そいつが腕輪付き。正直俺も驚いた。

『Fクラス	柊夜子	須川亮	VS	朝倉正弘	有働住吉
数学	250点	120点	VS	435点	
426点』					

「な、バカな!？」

表示された点数に須川が驚く。

その隙を狙って一瞬、一筋の水が須川の召喚獣の丁度心臓部分を貫いた。

「ありえねえ、朝倉と有働が400点オーバーだ!？」

早速リタイアになった須川が声を荒げた。その気持ち良くわかる。

「人の恋の力は不可能を可能に出来るほど頑張れるんだ!」 (↑朝倉)

「俺達は仲間の(不幸)為なら頑張れるんだ!」 (↑有働)

頑張るのはわかった。だがしかし、頑張りすぎだろう。

「ふ、柊……あとは……任せたぞ……」

パタッと須川が倒れた。何だろう、この子。全部俺に丸投げして

リタイアしたくせに、なんという死に際の言葉。

「さて、柊ちゅーん。お仕置きの時間でちゅよー」

「待て朝倉。俺が殺る」

ん、吸血はしてる間に攻撃されるだろうから無理として、アイツらの今の身体能力だと羽での得意の攻撃も近づいたら水の操作的な能力やらで反撃されるだろうし。手詰まりか。それに有働の能力も気になるからね。

どうしよう。

第二問 (2)

『Fクラス	柊夜子	須川亮	VS	朝倉正弘	有働住吉
数学	250点	0点	VS	400点	
426点』					

現時点で須川は戦死状態。つまり俺VS朝倉有働ということ間違いは無い。

単純計算、250点 VS 826点なわけで、実質的に3倍以上。能力の有無を考えると、戦力的には6倍以上だろう。

点数を奪う吸血は一对一だけしか使用できないし、速攻攻撃も今のあいづら相手じゃ必ず返り討ちに遭う。さてどうするか。

「柊いー俺と一緒にモテナイダラクシタジンセイオクロウゼー」
途中からカタコトになっている朝倉。そして、彼の召喚獣の腕輪が光る。

シュツという音と共にかんりのスピードで水が飛んでくる。

俺は召喚獣を横っ飛びさせた。

これで避けれーるはずは無く、ホーミングされ片翼を貫かれる。

「え？」

俺の声ではない、出した本人は紛れもない朝倉だった。

お前が狙ったんだろう？ と思って訝しむ視線を朝倉に送る。その時俺は見た。朝倉の後ろで葵が俺にほくそ笑んでいたことを。

あの野郎と思ったね。

葵は魔術を使って強制的に水を俺の召喚獣に向けさせやがったわ

けだな。なるほど、朝倉が素っ頓狂な声をあげるのも納得だ。

「次は俺だ！」

今度は有働の召喚獣の腕輪が輝く。

ん？ 一見何も変わっていないが。

有働の召喚獣が拳一つで突っ込んできた。そんなもの避けるのは容易く、最小限の動きだけで避ける――はずだった。

残った片翼が突然とんだ。豆腐を日本刀で斬るように容易く。

一瞬の思考の末、考え付いた有働の能力は、多分武器を見えなくする能力。水を操る朝倉に見えない武器を持つ有働。Fクラスとは思えないほどの強敵だった。

『Fクラス

終夜子

須川亮

VS

朝倉正弘

有働住吉

数学

112点

0点

VS

340点

400点』

やばいな。結構削られている。この状況で戦況を覆す最良の手段は魔術もしくは学園長からもらった腕輪。

俺は一瞬の迷い無く、学園長の腕輪を使用する。魔術なんて使うか。

エビファニー
「顕現」

ああ厨二臭いのは理解している。だがしかし、背に腹はかえられんだろう？ そうさ、これは不可抗力で俺は悪くないんだ。

と、まあ、やってみただけど作戦なんて無いんだけどね。

とりあえず、物体干渉能力を付加されたので、できる作戦を即座に立てる。

- ・地面を砕き、砂埃を立てさせ、状況に展開を期待する。
- ・朝倉と有働を買収。
- ・先生を昏倒さして勝負自体をなくさせる。

妥当がこれかな？

「朝倉！ 行くぞ！」

「おうっ！」

その声と共に二人の召喚獣がこっちへ突っ込んでくる。

まず見えない得物を所持する有働から極力離れる。こういう能力なら、アイツの得物のリーチを覚えとけばよかったと思う。後悔先に立たずと。

朝倉の召喚獣の武器は刀みたいなので、少しばかり射程が広い。横に一閃される刀を、バックさせ避けると、丁度死角からの攻撃になるように水が飛んできた。

それを俺はしゃがませて避ける。

反撃できない。

両方の羽が無くなったことで空にも飛翔できないし、攻撃も素手になるから戦力は実質半分以下となる。さて、どうするか。

「朝倉、有働、避けろっ！」

襲ってくる召喚獣二匹の攻撃をかわしながら、俺は朝倉と有働に言う。

「ん？」

「え？」

二者二様の感じに注意が召喚獣から逸れた。チャンスっ！

ひょいっと日本刀を自分の召喚獣に装備される。どうやったかは魔術とだけ答えよう。副作用があるんだけど、この際仕方が無い。

「よし、仕切りなおしだ！」

無理やり流れを戻す。

「ずりい」「ずっる」とか言われたが気にしない。

とりあえず場の好転を期待して、刀で地面を突き刺す。勿論俺の召喚獣の腕力は人間より強いので意図も容易く粉碎される。そして数回地面を斬ることによって、場を満たす砂埃。これで奴らは影しか見えな——いこともなく、普通に見えていた。流石屋外。風の力恐るべし。

何がしたかったの？　みたいな視線が突き刺さるが、察してくれ。

そして、朝倉が水を俺の召喚獣へ向けて放ってきた。

——ああ、かったる。

——パチン、と指を鳴らす。

真っ直ぐ貫くように発射された水が、突如方向転換し、朝倉の召喚獣に突き刺さる。

朝倉と有働と立会人や観客が目を丸くした。
チャンス。

刀で有働の召喚獣を一閃。

「ざまあみろ」

その一言で勝負は決した。

第三問

以下の問いに答えなさい。

『PKOとは何か、説明しなさい』

姫路瑞希の答え

『Peace-Keeping Operations（平和維持活動）の略。

国連の勧告のもとに、加盟各国によって行われる平和維持活動のこと』

教師のコメント

そうですね。豆知識ですが、United Nations Peacekeeping Operationsとも呼ばれたりします。余裕があれば覚えておくと良いでしょう。

柊夜子の答え

『Player Kill Operations（プレイヤー殺し作戦）の略。

自分の利益の為に他のユーザーを狙う、卑劣な集団が成す作戦のこと。

これは許しておけるべきじゃない、葵が俺のキャラを「ごめんねー」とか言いながら殺しまくり。そのせいで俺はアイテム収集の為に――』

教師のコメント

平和の為頑張ってください。

よって一回戦の朝倉有働ペアを打ち破り、無事二回戦が進んだわけだが、ここで問題発生。

俺は英語が苦手なんだ。

というか、苦手云々じゃなく俺のテストの点はその日の気分によって上下するからややこしいんだけど、英語だけはずっと低い。全力の左手でやっても普段より低い。べ、別に利き手じゃないからってっ！！

そんなわけで、何故英語苦手論で騒いでいるか、それは二回戦の勝負科目が英語だからだ。しかも敵は秀吉の姉さんと霧島さん。両方Aクラスだけあって勉強は凄いだろう。なにしろ片方は学年代表だもの。

「それでは、試験召喚大会二回戦を始めてください」
今回の担当は英語の遠藤先生。結構優しく、悪いことでも少しぐらいなら目を瞑ってくれると評判な先生だ。

「――「試獣召喚!」――」

4人の声が重なって足元に幾何学模様が浮かぶ。そして顕現する召喚獣。

「ふ、柊よ。俺は鍛錬に鍛錬を積んで、俺なりに頑張ったんだ」
隣で須川が俺に言ってくる。なるほど、それは良い心がけだが、

『Fクラス 柊夜子 須川亮 VS Aクラス 霧島翔
子 木下優子

英語W 14点 28点 VS 4
20点 350点』

どう頑張ったのか俺に教えてほしいものだ。

まあ、点数なんてどうでもいい。要は敵をぶっ潰せばオーケーなのさ。つまり作戦とかで――

「……俺達負けたなあ」

覆せる戦力差では無かった。

「あれ？ 夜子君？」

「……何か最近優子様と縁があるようで」

しみじみと小さく呟いたのが聞こえたようで、優子様の逆鱗に触れたようだ。

「代表、ちゃっちゃと終わらそうか」

「……待ってて、雄二」

「聞いてないけど、まあいいや。行くよー」

そんな軽い言葉と共に、優子様の召喚獣が須川の召喚獣に突っ込み、そして手持ちの得物で胸辺りを貫いた。

「柊、あとは……お前に……任せたぜ……っ」

須川死んでばっかじゃね？

「さて、次は夜子君かなー？」

どうやら、俺も処刑されるらしい。

どれ、俺も作戦1を使うか。

すぐ近くまで来ていた優子様の薙ぎの一閃を跳んで避けて、首筋辺りに吸血する。

そしてここからが作戦。

「霧島さん！ 代表が後ろにいるよ！」

こちらへ突っ込んで、吸血を止めさせようとする霧島さんの召喚獣の動きが止まった。

これぞ作戦1、霧島さんの注意避け。

そして、次の作戦2！

「性職者！ 取引だぜよ！ 写真くれ！」

背後でいつの間にかスタンバイしていた性職者に語ると俺の言ったことがわかったのか、写真を投げてきた。

「……………（グッ）」

「サンキュー」

その写真を霧島さんに投げて渡す。

「あっちで代表が誰かと手をつないでトイレに行ってたぜよ！」

さっきトイレ行くのを見たけど、それに合わせて言ってるやろう。

これで霧島さんはどっかに行くはず！

「……そう」

それだけ呟き、俺たちに踵を返し校舎に向かっていった。……計画通り。

「ちょっと代表！ ああーっ、負けるってー！」

優子様は必死に霧島さんと呼ぶけど、残念ながら我が代表の独

占したい状態になるとこっちの優先順位なんて些末な問題なんだろう。

改めて見ると、これは何かエロいな。いやいや、そんなエロいことしてないんだけど、デフォルメされた俺が優子様の召喚獣の首に噛み付いているってことで、且つ、優子様の召喚獣の頬が心なしに赤くなっているから――

カカカカカッ

俺の周囲の足場にカタールナイフがめっちゃ刺さっていた。流石Fクラス男子よ、出し物最中でも色恋沙汰の邪魔する時はするんだな。よく旧校舎のFクラス教室の窓からここを狙えるもんだ。

「さて、優子様負けを認めるんだな」

「……葵ちゃんに言いつけてやろうかしら？」

くっ……!!? こいつ何て事を……っ!?

「良いのかなー? 早くこれを止めないと言っちゃうわよ?」

「ふ、女の子に手をあげない主義なんだ。勘弁してください」

不承不承と俺は吸血を止めさせる。うん、俺紳士。決して脅しに負けたわけじゃない。

『Fクラス 終夜子 須川亮 VS Aクラス 霧島翔子

木下優子

英語W 114点 Death VS Un

known 250点』

くっ……くそ! まだ二倍以上あるのかっ!

「そこから動いたらダメだよ？ 動いた瞬間に葵ちゃんに言いつけるから」

やばい、万事休すだ。どうする俺。

・魔術↓副作用が酷い。というか魔術なんて使いたくない。さっき使ったのは葵と久しぶりにあって懐かしかったからと思う。

・取引↓優子様相手にどうするか、悩みどころだ。

・負けを認める↓葵様に着せ替え人形にされる、この選択は一番検討する必要がある。

ここは無難に取引か？

「優子様、取引をしよう」

できる限りの神妙な顔を作り、言う。

「取引？」

何でいまさら？ みたいな顔して返事をされた。まあいい、今はこの選択しかないんだ。

「そう、取引だ。俺に勝ちを譲る代わりに優子様の言うこと一回だけきくっていう話だ。良いだろう？」

優子様……頼む、俺に勝ちを譲ってくれ！

「そうね。何でもいいのかしら？」

意地悪く笑った気がする。

「ああ、だから頼む！」

土下座とまではいかんが頭を下げる。俺なりの真摯な頼みだ。

「いいわよ、私達の負け——って言っても優勝目指していた代表が不在なんだけどね」

「感謝します！」

また俺は頭を下げる。着せ替え人形にされるよりマシだ。

「柊君と須川君の勝利です！」

遠藤先生の勝利宣言を聞き、俺は未だ倒れたままの須川を担ぎ場をあとにした。

「何でもいって言ったわよね？」

その言葉が妙に頭に響いていた。

第三問（後書き）

遂に姉の自称実験に巻き込まれそうなので更新が遅れるかもしれないです。読んでくれている方にはすいません。

実験↓人は山の中で何日生き残れるか。

勿論途中で脱走するんですが、家に帰ってくるまで少し時間がかかるかもしれません。とりあえず、今年中には帰れそうにはないです。

追記 1月1日昼頃に一旦帰宅しましたが、姉に発見された為また少し更新遅れます。すいません。

再追記 1月10日現在帰還しました。決して私は泣きません。そして学校の始業式が1月8日だったことに驚きを隠せません。というか現実を見たくなかった。

あと、私の書いたこのバカテスの二次創作小説を読み直したところ、糞臭がぷんぷんとするので、またプロログからの駄作達を推敲しなおしていきます。流れるにはあまり変わっていないので——会話文とかは大幅に変わりましたが——そんなに読まなくてもいいかもです。こんな駄作小説を投稿する作者でも見てくれる方には感謝です。

夜子君は私と同じ立場の人間なので是非とも姉を殺してほしいです。決して私は姉に逆らえませんが。

今月は演劇部の都合上、更新がまばらになる可能性があります。

第四問

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『喫茶店を経営する場合、ウェイトレスのリーダーはどのように選ぶべきですか？』

【？可愛らしさ ？統率力 ？行動力 ？その他（ ）】

また、その時のリーダーの候補も挙げてください』

柊夜子の答え

『【？猫耳薄幸美少女】 候補……存在しないから拉致するべき』

教師のコメント

現実と妄想の区別をつけるべきですかね。

「疑問に思うことがある。何ゆえ俺はこんなところに？」

「……………敵情視察。柊は写真の恩がある」

ところかわって場所は、Aクラス。試召大会3回戦の1時間前にあたる。

須川は中華料理だっ！ とか叫びながら試合終了後、即教室に戻ってしまった。変態補正でも働いているのか。

よって暇をもてあましていた俺は、後ろにいつの間にか待機していたムツツリーニこと性職者に写真の恩とか言われて有無言わせない感じで連行されたのだ。

流石ムツツリーニという名前だけある。一人じゃエロスの塊だと思われるから俺を誘ったわけか。なるほど、流石ムツツリだ。

本人の前だから口には出さないけどね。

「写真ね。俺が言うのも何だが、良く分かったなあれだけのことで」

本当に大したもんだ。あんなだけの短い言葉だけで俺の求めている写真をくれるなんて。

「……………俺を誰だと思っている」

流石というべきか、瞬時に代表と別の女の子がトイレに入る写真を合成して印刷するなんて人間じゃない。だがしかし、べた褒めするのはこっちも恥ずかしいので茶化す。

勘違いしないでよね。別にツンデレじゃないんだから。

「寡黙なる性識者」
ムツツリーニ

「……………くっ、雄二め。いつの間に終まで」

「いやいや始業式に俺いただろ」

性職者と二人で喋るのはあまり機会が無かった為、少しばかり気まずい雰囲気になるかなと思ったが、どうやらそれは杞憂だったようだ。普通に喋りやすい。

「ああ、始業式な。……………そういや俺もここ来てから3、4ヶ月は経つか」

思わず感傷に浸る。須川達異端審問会に振り回されてたからあまり思っちゃいなかったが、結構経ってるんだよな。あー、元の世界に戻りて。けどね、秀吉や須川達と別れるのも辛く感じるよね。

……………なんというジレンマ。どうせ戻るしか選択肢はないけどね。

「……………？ とりあえず（ぐい、ぐいっ）」

首をかしげながらカメラを渡してくる性職者。

？ 何に使うんだ？

「……………（ぐっ）」

「いやいや、親指立てられてもわかーな、なるほど！ パンチラか！」

「……話が分かる奴は好きだ」

性職者は、ふ、と一瞬怪しく微笑んでから、パシヤパシヤパシヤ
！と指が擦り切れるのでは、と心配になるほど高速にシャッター
を切る。

思わぬところで好感度アップ。別に野郎攻略したいわけじゃない
んだからね！ だがしかし、人というのは稀というべきか、意図せ
ぬところばかりでフラグが立つことが多いのさ。

——このように。

「あれ夜子見に来たんだ？ さてはメイド服にやられたな〜？」

さて、俺は本能に基づいてFクラスに帰るか。

がた、と席を立つ俺にその肩を掴む葵。

ヲイヲイなんてこったい、ジョニー。何で俺の肩が脱臼寸前なん
だ？ お前本当に女の子か？ ゴリラの生まれ変わりで珍種登録さ
れるよ。

表情の定義から言うと笑ってる和やかな二人の顔。心情の定義か
ら言うと「おい、ふざけんなよ。どうせお前今年一人だっただろ？」
「いくらクリスマスだからって俺が二人になるわけ——ぐふっ、言
ってて哀しくなるぜ。てめえは？」「ああ、俺サンタだしww」「
そうか、死ね」という感じ。

そんな折、入り口で誰かが入ってきた。そして対応する店員は霧
島さん。

「……おかえりなさいませ、お嬢様」

胸がときめいたのは言うまでもない。当然俺の心のスイッチは入

った。

「――性職者！ 準備完了！ パンチラ準備――あああああっ！！
腕が！ 足が！ 身体全体に虫が這う感触がする！ 無理！ 死
ぬうううっ！？」

「私が手を下すまで無かったようね。文句は義姉さんに言ってね」

やばい！ これは本格的に怖い！ なんつーか、本能で悟る怖さ
だこれ！ 姉貴打ち殺してえ！ 死ね姉貴！ やや、これは――っ
て性職者いつの間にいねえし！？ 傍から見たら俺って一人、床で
のた打ち回る変人に見えるじゃないか！

か、勘違いすんなよ！ これは目から流れる汗って言って決して
涙じゃないんだから！ く、くっそおおお！

俺はその後床をのた打ち回りながらAクラスを避難した。偶々い
た吉井達主人公メンバーやAクラスの数々の面々（優子様や葵、霧
島さんなど）、客に奇異の視線を向けられていたのは言うまでもな
い。

後日談というべきか、Aクラスにいた吉井と代表がFクラス教室
に戻ってきた時に秀吉も含めて家族の中にいる物凄く困る人で意気
投合し、仲良くなったのも言うまでもないだろう。

代表は母親で、秀吉と吉井は姉貴らしい。皆、苦労人だのう。

第四問（後書き）

やばいです。何故か私の役が酷い役に抜擢されました。世の不条理です。べ、別に泣いてないんだからね！ 詳しい台本は確認していませんが魔女的な位置する女の役らしいです。全部部長の趣味の台本なんです。決して私はやりたい！ なんて言った覚えありません。

学園内でちょこつとすると書いてもやっぱり恥ずかしいですね。こういうのって。

第五問

「おまたすえっ——お待たせしました！　これより準決勝を始めた
と思います！」

少しばかりに舌足らずなこの話し方。そして紛うことなき、低身
長に貧乳。——葵だ。しかも何か囁んでるし。

「よう、葵。何してるの？　そこまで俺に喧嘩売ってるの？　明日
から飯、緑一色にするよ？」

「や、偶然だね……っ！　まさか夜子がこんなところに——」

「……………」

俺の非難の視線を感じ取ってか、世話しなく葵は視線を泳がせ。
そして司会を進めるためにまたマイクに向かって声を発する。

「出場選手の入場——吉井君、坂本君の入場です！」

大声援の中、ゆると吉井と代表が歩いてきた。

……やばい。結構緊張するかも。

となりの須川も一緒なのか、足が震えている。武者震いと信じて
やまないぜよ。

「よう！　夜子！　さっきは召喚大会の手前、我慢したが——よく
やってくれたなあ？」

無駄に良い挨拶のあと、一瞬代表の後ろに阿修羅が見えた。

さっきは普通に話していたから、霧島さんの偽造写真については
もう許されているとは思ったが——なるほど。助けてほしいぐらい
に怖い。

「ワタシ、何もわからんアル！　須川君が全て悪いアル！」

「えっ！？ 全て俺の責任！？」

「大丈夫だよ。柊君は絶対に制裁するからね」

おかしい。俺は吉井については何も悪いことしてないはずだが。

「まあ精々生を味わうんだな」

代表はそれだけ言うと、反対に向いた。

気障っぽいのが、野性味溢れる代表がやると、物凄い猛者の鷹揚さに感じられたんだ。

勘違いしないでよね。別に——殺意が沸いたんじゃないんだから。大丈夫だ。大丈夫。別に奴は殺意が沸くようなことしていない。けれど何だろう、この気持ちは？ 何か奴が悪いことをして、その被害の責任が俺に向かってくるような……虫の知らせみたいなのは。

「もういいよ、須川君。——いやダウルス君」

「ふ……やっと俺の出番か……」

開いた口が閉じなかった。

……ダウルス君って誰？

「こら、そこ！ こいつ何言ってるんだ？ やっぱバカだから？ みたいな顔やめて！ 泣けるから！」

「いや、大丈夫。バカというのは疑問に思っていない」
うん、本当に。だって——

「え？ それってつまり——」

「断定だぜよ」

「うわあああああん！ 雄二！ ダルウス君！ 一緒に柊君を狩る

よ！」

泣きながら、吉井は須川（仮）——いや本物なんだけれども——代表に声をかけた。どうやら俺を狩るらしい。決してリアルな方面じゃないよね？　だって葵発見の時点で一ヶ月ぐらい俺、異端審問会と戦ってたからもうリアルな方面はないよね？

「剥製にするで！」（↑須川）

関西弁が果てしなく謎だった。そして俺は剥製にされるのか。

「おおっと、盛り上がってまいりました！　これより試合を開始します！」

大歓声、耳を劈くような轟音が場を満たし、あたかも時間を止まっているような感覚に俺を陥らせる。感無量。

さきほどまで緊張が嘘のように引いた。なんというか現実が現実と捉えられないような感じで上手く言葉に形容できない。須川も一緒なのか、足の震えがいつの間にか止まっており、心なしか顔がすつきりしていた。決してイケメンになったというわけではない。表情が、である。

「我が真名はダルウス二世！　俺達異端審問会は一生に一度だけ真名を解放することによって圧倒的な戦闘力（主にモテる男子に対して）と知識（主に性に対して）、そして、能力を手にする！　勿論、吉井もそれに含まれる！　よって貴様に勝利など無いわ！　あっはっはっはっ！」

「……………うわぁ」

思わず開いた口からそんな声が出た。祝、全国オンエア。つまり須川厨二発言がそのまま全国へと。

……あとでようつべから動画ダウンロードしょ。多分物凄くニコとかでアップされているだろうね。

……日本終わったなあ……。

「そして僕の真名は豆腐！」

……豆腐？

そしていざ、厨二名と代表VS俺の乱闘に入ろうとした時、制止の声がかかった。

「その勝負待ちな！」

声の主は学園長だった。

「はえ？」

そしてこれは葵。可愛い素の言葉だったんだがいかんせん、葵だ。決して萌えるはずがないだろう？

「恥さらしもいいところだよ、全く——ん？ 放送されているさね？ あーはいはい、カットしてくれればいいさ」

テレビ慣れしているのか、割と上手く対応している。

目下一番恥さらしなのは貴女の気がするのには気のせいですか？

いや須川も、須川もだけれども。小洒落た感じにババアがやっていもんじゃない。だって学園長だぞ？ あの学園長ね？

「予定変更さね。これよりA、Dブロックの準決勝者とB、Cブロックの準決勝者の対抗演劇をやってもらう。勿論、ルールの明文化させたものは後で配布してもらおうよ。開催は明日の正午からさね。より良いクオリティにする為に演劇部の連中を手伝わしても、他の学年、クラスの人を手伝わしても大丈夫だよ。台本についてはこちらから指示するものはないさ。それで良いさね？ 教頭」

「勿論です」

それだけを言い残し、学園長は颯爽と去っていった。

いつの間にかいた教頭も、口元に薄い笑みを浮かべながら校舎に入っていた。

……演劇は秀吉にでも頼むかな。

第五問（後書き）

文章が少ないのは勘弁してください。今現在、私は忙しいのですとだけを……っ！

大丈夫です。まだ私は死にません。死ぬなら夜子も道連れにします。今回、演劇の話を持ち出してきたのは他でもありません。私が夜子を道連れにする為です。

大丈夫です。公演まであと一ヶ月あります。多分いけるでしょう。

それと最近思ったのですが同性愛って結構怖いですね。いえ、別にうちのクラスにいるわけでも、また部活内にもいるわけではないです。

ただちよつと、最近とある人物から手を握られたり、抱きつかれたりするわけです。スキンシップと言えばそれまでですが、目下感じるこの怖気は明久が久保君に感じる怖気と同じ類の気がします。断じて自意識過剰ではございません。ただそういう人がいるのです。

登校時のシーン抜粋。電車の中。一瞬痴漢と勘違いしました。

私「ちよ、ここ、公共の場やん！」
きやつ「っ（にこ☆）」

人間って怖いなって思い始めました。ただでさえ演劇で忙しいのに、ましてや同性愛問題？

誰か私にこういう子の対処法を伝授してください。私はエロゲが好きですが、BLとか好きな人ではないんです。男子も女子も同性愛に対してそこまで良い感情を抱いていないのは確かです。別に否

定してるわけではありませんが、趣味嗜好的にはまらないだけです。
誰か私に（r y

第六問

古来より魔術師というのは魔女と呼ばれ、奇跡と呼ばれることを起こしてきた。

では、男の魔術師はいないのか。

答えはイエスでもあり、ノーでもある。

何故このような解答になるかというと、俺が魔術師であり、男だからだ。

当然俺のような個体は特異中の特異である。

皆は特別な存在だと言って羨ましがるが、目下役立たずの肩書きなんだ。

なぜ。

それは――。

「ローズ！ 何故！ 何故私を見捨てるのですか！」

急遽召喚大会の予定が変更されたのが今日の昼頃。

主題は演劇。

あれ、召喚獣関係くない？ というが、大いに関係ある。

元々召喚獣というのは愛嬌があり、且つ、小さいので、なるほど人形劇にもっていいいだ。

普通の人形劇より精密に動かせるし、普通の人形より大きいので良く見えるだろう。

まあ、所詮人形より大きいと言ってもそれほどではないので召喚大会を行っていた場所でやってもブーイングの嵐だと思う。

が、それすら考慮にいれた内で話を進めていたらしい、学園長と教頭。

マイクなどその他もろもろを準備はもうできていると、ついさきほど明文化したルールをもってきたときに述べたものだ。

「サラ、俺はダメだ。だって……止せ翔子。今は演劇の練習中だ。だからそのアイアンクロー——」

「……雄二と一緒に行きかけた」

♪ B G M 世にも奇妙 ♪

「おかしい！ そのB G Mは間違ってるよ、ムツリーニ！」

「……………間違えはない。ただの誤算があるとすれば——」

「学園長がメイドの格好だと……っ!？」

ですよねー。

俺もそれを疑問に思っていた。

「まああれじゃな。学園長も何かの企画に参加しておるんじやろう」
流石秀吉だ。

だが、あれは絶対企画に参加していたんじゃない。

きつと、「はっ！ アンタ達が暴動を起こさないために俺がメイド服を着てそっちへ向かうさね！」的な？

一瞬トラウマになりかけたぜ。

そんなわけで秀吉が持ってきてくれた、『魔女と狼男と女の子』を現在進行形で練習中なんだが、霧島さんや学園長などの邪魔が入り、皆演技ができそうがない。

最悪、人形劇なので台詞を覚えなくても大丈夫なんだが、棒読み

になってもいけないし、念のために覚える必要があるだろう。

「どうする？ 完全下校時刻までもう少ししかないし、アドリブでやる？」

この提案は俺だ。

一応俺は数々の姉の実験で色々スキルが身体に叩き込まれている。そして演劇も例外ではない。

俺はできると思うが、問題は吉井と代表に須川君。

「いや、今日は徹夜してでも練習しよう。俺達はどうしても勝たなきゃならんからな」

「そこまで賞品欲しいの？」

「違う！ 決して翔子と一緒にいきたいわけ——待て翔子。包丁をどうする気だ。そんなもん人間に刺さったら死ぬに決まってるだろう？」

嗚呼、代表。よく今まで生きていられたな。可哀想に。いや具体的に描写できないが、可哀想に。

「なるほど。それじゃ、腕輪がそっちでチケットは俺にくれ。渡したい奴がいる」

勿論相手は霧島さん。ふ、攻略が難しい奴からしていくのが俺クオリティだ。

や、攻略が不可能な秀吉を攻略する気じゃないぞ。

「柊君は勿論柊さんに渡すんだよね」

何、その悟った目。何も悟れてないんですけど。俺が渡したい人はお前の横で包丁片手で代表の手足を縛って馬乗りになってる女の子なんだけど。

「へいへい。俺は賞品いらねー。だから今晚お前の家に泊まらせろ。

それで中華料理の出し物がチャラだ。悪くない条件だろう？」

あれ、俺こいつにフラグ立てたっけ？　いつ立てたの俺？

あー……なるほど。なるほどねえ。

「なるほど。理解した」

「そうか。だったら――」

にやりとした須川に俺が納得した理由を言ってやる。

「――家宅捜査して、まだお前に貸してないエロゲを見つけるんだな？」

「ちげえ！　いや違わないけどちげえ！」

「え、どっちだよ」

いまいちわからん。こいつがうちに泊まりにくるのってたいがいエロゲ発売日の時だろ。何で今俺に憤慨してきたんだ。

「ほらさ。お前の家にさ――」

……あー、一番予想したくないことが当たったらしい。いつの間
にばれていたんだ。

「美咲ちゃんの抱き枕……ね……」

「おい待て。何勝手に言ってるんだ！　俺が言いたいのはほらあれだよ！」

んー美咲ちゃんの抱き枕目当てじゃないとすると、齒切れ悪いのと推察して――。

分かん。

「何だよ。早く言えよ」

少々苛立ち紛れに須川に言っていると、ようやく堪忍した模様で
魂胆を述べた。

「――葵ちゃんの部屋見せて」

.....は？

え、見せてってアイツの？

あのバカの？

家事一切できない奴の？

空気が固まった。

須川が物凄くいたたまれない。

「変態だ！ 変態がいる！」

この固まった空気をいち早く切ったのは吉井で、続いて俺が。

「――須川。そういうのはプライベートの時話そうな？ まさかお前がそんな変態だったなんて」

変態すぎる。鬼畜だ。気色悪いぜ。

「わ、わしは夜子の部屋が見たいのじゃ！」
無視しよ。

わーい、秀吉攻略おつかれーッス。

3ヶ月で同性を落とすなんて罪な男。

いや冗談じゃなくマジで。罪というか罰というか。

「いや、まあ。うちに泊まりにくるのか？」

泊まりとは初めてだな。いや須川はしょっちゅう泊まりにくるか。
まあ朝倉、代表や吉井あたりは俺の部屋に遊びに来たことはあるか。

.....主にエロゲを借りるために。

「わ、わしはどっちでもいいぞ」

や、今さらそんな、別にアンタの為じゃないよ、みたいに言わんでも。さっきお前盛大にカミングアウトしてただろ。

「俺も――待て翔子。今この状態で包丁をさされたら死ぬ」

最近見慣れたのかな。この情景に何の疑問も感情も思い浮かばん。

「僕は晩御飯を奢ってくれるなら、むしろありがたいよ」

現金なやつめ。趣味にまで仕送りを使うから家計が辛いんだよ。

そして俺も例外ではない。

金を作る魔術があればな。多少のリスクを負ってでも使うのにな。

ちくしょう。

「……雄二が行くなら私も行く」

吉井ではないが、むしろありがたい。

「……………（ぶはっ）」

一体何を妄想してやがるのか知りたいところである。

いやまあ、分かんんでもないが、でも妄想すると姉の呪縛？ 的

な感じな嫌がらせが俺を襲うんだ。

性職者。すまない。だから俺の分まで妄想してくれ。

何故かその呪縛は二次元に妄想する限りには適用されないのかは分からないが、姉貴が何らかの腐った要素を持っていないことだけを祈ろう。

「部屋は余裕で空いてるし、演劇の練習にも丁度良いだろう。だが、お前ら。一つだけ言っておこう。俺の家に泊まるからには――聖典エロ本と恋愛ゲームエロゲーを持って来いよ？ 練習が終わり次第、各々が気に入っているルートを徹夜でやるぞ」

『勿論だ!』

本当に、Fクラスだなあ。って改めて思った、まる。

第六問（後書き）

さて、皆さん元気でしょうか。私は元気です。貞操もまだ大丈夫です。

最近非想天則に出没していますが、いかんせんゲームが下手なので未だEXとHの間をさまよっています。ユユ様強いよ、ユユ様。そしてどうやってもスイカと空に勝てそうにありません。火力が別次元です。

レミリアって結構火力低いんですか。魔方陣コンボきめてもそこまでダメージが行かない気が。2k付近で止まるだけで……別に空に嫉妬してるわけじゃないし！　いいえ嫉妬です。あの火力には不覚にも嫉妬してしまいます。

というかあれ？　バカテスの二次創作がいつの間にかめっちゃ増えているのに今気がつきました。

第七問 (1)

「おい、お前ら分かってるよな？」

真っ黒な部屋に照らされる4つの影。

「勿論さ、須川君」

光源は携帯。

「とりあえず代表は囧として扱う。問題ないな？」

今は空き部屋だが、一応の生活家具は揃っている部屋での作戦会議。

——俺達はエロゲを買う為に作戦を立てていた。

「夜子、お主本当に良いんじゃない？」

代表には申し訳がないが仕方が無い。俺もさっき演劇の練習を終え、携帯の日付を確認するとまさかこの日だったなんて知らなかったんだ。

仕方が無いだろう？ ——予測できなかった事態だったんだ。

「夜子、葵ちゃんの部屋は見せてもらった。だから俺もこの聖戦に命を懸けよう」

「ああ、大丈夫だ。でもまさか本当に今日だとはなあ、未だ信じられないぜよ」

俺の言葉に秀吉以外が頷く。

「お主ら、本当に後悔しないんじゃない？」

「止めないで、秀吉。僕達はやらなくちゃいけないときがあるんだ。」

それが今日だよ」

「……いや全然分からんのじゃが」

首を傾げる秀吉はパジャマ姿。それから分かりえることは秀吉は此度の聖戦には参加しないということだ。

「現時刻は、11時15分。今から行っても20分はかかる。――俺が言いたいことはわかるな？」

「……つまり俺達は後発組」

ぼそりと付け加える性職者。今夜の彼の目はムツツリの光とは違う、英雄の目の光だ。

「そう、後発組は当然買えない可能性が8割以上から9割5分程度を占めていると言っても過言ではない。だからこそ決まっているだろう？　ここはお前達の出番だ。なあに、やりようはある」

「どうするの？」

吉井に続き聖職者、須川が如何にと問いかけてくる。

「擬似的に召喚獣を召喚して、奴らの注目を外させる。そのために必要なのはこれだ」

そう言い、俺は学園長からもらった白金の腕輪の試作品みたいなのを提示する。

こいつの能力は観察処分者と同じように物体干渉能力を付加させる程度だ。

が、俺は魔女。

魔術を用いれば可能だ。

フェイクと駒は用意されている。

だいぶ前にA組と試召戦争した時は観客が多くて使用できなかったが、この際は大丈夫だ。

――いける。

「それって、白金の腕輪？ 何で柊君が持ってるの？」

俺の持つ白金の腕輪を見た吉井はそんな質問を投げかけてきたので、

「学園長にもらった」

こう答えた。嘘はついていない。ただ秘密にしているだけだ。

「……んー」

未だ釈然としない様子で何か考えている吉井だが、今はもう時間がないのであまり気をかけられない。

「もう一度条件を確認するぞ？ 葵と霧島さんと代表に見付かってはいけないのと、エロゲ深夜販売に並ぶ勇者達の気を引くことが今回の条件だ」

『了解！』

「……お主ら年齢制限について何も思わんのか」

俺達は窓から脱出を試みた。

が、それを阻む奴が一人。

忘れていた。

奴は昔神童と呼ばれていたことを。

「なあ、明久。俺はなんでここにいると思う？」

恐ろしくて、優しい矛盾した言葉。

だが奴はあくまでも吉井だけを狙っている様子。

——いけるか？

否、行くしかない。

嫁達と一緒に過ごすのに待つ必要があるか？

無いね。

須川、性職者とアイコンタクト。

『見捨てるぞ』

『了解』

そんな会話が一瞬で展開され、どうするか決まった。

先に動いた性職者。

続く俺と須川……だったが――

――がし。

「ねえ、夜子。どこ行くのかなー？」

「ふ、どうやら俺の命はここまでのようだ。金はあとで払う！
こは俺に任せて須川と性職者は先に行け！」

言うしかなかった。

こいつに捕まったら終わり。

いや待て。俺がいなくちゃ召喚による作戦は実行できないんじゃないのか？

く、俺が掴まった今、成す術が無いのか？

――いやまだある。

「代表！ お前最近彼女できたとか言ってなかったか！？ なあ、
吉井！」

「そうだね！ 最近繁華街のとある所に行っていると聞いて驚いた
よ！」

ああ、人でなしとでも呼べばいいさ。だがエロゲを諦めるなんて
俺の辞書には無いんだ！

刹那、スタンガンを持った霧島さんが玄関から出てきて、
「待て翔子！ 早まるな！ こいつらの言ってることは嘘に決まっ

てるだろ！ しかもとある所はゲーセンだ！」

「浮気は許さない」

「ちくしょう、明久、柊！ 明日お前らのダンボール箱を粉碎してやるからな！ 姫路のりよ——ちよつと待て翔子。お前は俺を何だと思っている。包丁は止めろと前に言っただろう？ 落ち着こう。まあ、待て。とりあえずそのチェーンソーを置いて話し合おうじゃないか。だから次から次へと凶器を出すんじゃない。え？ どれがいいって？ ならそのスタンガンで頼む。一番それに耐性がついているからな。俺が気絶したあとに何にもするなよ？ わかってるよな？ ここは柊の家で、お前の家じゃない。つまりいつもお前が俺にする豆腐漬けとかはここではしてはいけないんだ。わかるな？ よし、わかったなら俺はもういい。思う存分にスタンガンで——」

凄。何が凄いかというと、凶器を突きつけられて逃がすという選択肢が無いのに驚かないのが凄。

家の中で何が起こっているか見たいが、一生のトラウマをかかえそうなのでちよつと自重しよう、俺。

家の中で聞こえてきたさきほどの代表の声に、流石の葵も驚いて啞然としている。

——好機。

拘束している葵の腕を振り解いて、数歩後ろに下がって啞然としている吉井の横に立つ。

「どうする、柊君？」

「どうするもこうするも無いね。お前じゃ勝てないだろう」

——だってアイツ魔術使うのに躊躇いなんて無いもの。

「何？ 僕が女の子に負けるとでも——くっ、栄養が切れそうだ」
「だから飯を食えと言っただ。——葵の」

「僕は舐めていたようだ。ダークマターもとい姫路さんの料理と並ぶ料理が出されるなんて」

とりあえず会話はここまで。

開店時刻は11時45分。

走れば20分ぐらいかかる。

そして現在の時刻は11時20分。

不味い。恐ろしく不味い。

どうやら先に須川とムツツリーニが行ったのは良いが、俺達はいけそうにないらしい。

あとはアイツらに任せるか？

いや。

待て。

何かがあるはず。

——きつと。

「もう懺悔は済んだかなー？」

もう時間はない。

魔術を使うのはいいが、一日に二回を使えるか？

いや無理だ。

使うと引き返せなくなる。

本当に魔女になってしまう。

落ち着け。

吉井が「ちょ、柊さん待って！」葵を引き付けている「死ぬ！

包丁はダメ！」間に作戦を考える——「柊君待てええ！ 何で僕だ

けほって行くんだよ！？」さあ逃げるか。

「この人でなし！ 絶対あとで鉄人に言ってやるからな！ 実は担任になった春の時から密かに親身になっていたのさ！ 僕の言うことは（反対の意味で）ちゃんと信じてくれるんだからね！」

背後で奴の声が聞こえるが空耳だ。

俺は、奴が人柱になっている間に何としても店に着かなければならない。

——間に合うか？

いや間に合う。

俺は諦めない。

二兎追うものは一兎をも得ぬ。

上等だ。俺はエロゲだけを追ってやろう。

——俺は諦めない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9031i/>

バカとテストと召喚獣 ～姉の呪術によりまさかのバカテスの世界へ！？～

2010年10月11日21時43分発行